

# 世界革命戰線

國際連續武裝遊擊戰爭勝利！

Vol.6

'74. 10. 20

## 目 次

シンガポール・クウェート連続武装遊撃戦争万才ノ	3
アラブ・パレスチナ革命連帯・不退転の武争闘争をノ	5
パレスチナ革命の現段階	17
パレスチナ解放人民戦線第三回大会政治報告	21
ハーグ仏大使館占拠同志奪還闘争勝利ノ	37

# シンガポール・クウェート 連続武装遊撃戦争万才ノ

## 世界革命戦線情報センター

我々、世界革命戦線情報センター（IRF・IC）は、一月三十一日、日本赤軍とPFLPによって組織された「バセル・エル・コーバイン隊」によるシンガポール・ブクム島・シエル製油所襲撃爆破闘争（シンガポール作戦）、そして二月六日、「ガッサン・カナフアーニ隊」による、クウェート日本大使館占拠、「バセル・エル・コーバイン隊」毎選闘争を断固支持し連帯することを表明する。

シンガポール作戦は、ベトナム・インドシナ人民をはじめとするアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国の人民との固い戦士の団結をかちとり、帝国主義者・シオニストの東南アジアにおける重要な反革命戦略拠点の一つであるシンガポール、そして国際石油資本（メジャー）の一つであるシエル石油株式会社に対して行なわれた闘争である。

シンガポール政府は多数のユダヤ国際資本を受け入れており、シンガポール人民を搾取しており、またシオニスト・イスラエルの軍事顧問を受け入れ、シンガポール反革命軍隊の強化にあたっているのである。又、シンガポール政府は、今回の闘争（シンガポール作戦）に対して一見柔軟的態度をよそおいつつも、ダブル・エル・ミサイルを装備する高速ボートを、「ラジュー号」近辺に配置してい

たことを我々は見落してはならない。

今回の作戦の攻撃目標となった、シンガポール・イースタン・ペトローリアム社は、英蘭合併会社のローヤル・ダッチ・シエル石油会社の系列会社であり、ブクム島製油所は東南アジアで最大の石油基地であり、また米帝の東南アジアにおける米海軍（第七艦隊）、米空軍の燃料補給源としてあり、ベトナム、インドシナ人民に敵対しているのである。

シエル系石油会社はシオニストの資本投下が行われており、アラブ・パレスチナ人民から石油を搾取したうえで、更に全世界の人民の中で三位の位置を占め、東南アジア一帯の市場独占をめざしているのである。シエルを始めとする国際石油資本は、いわゆる「石油危機」なるものを、アラブ反動派Ⅱ王国ブルジョアジーと結託したうえで、全世界に反革命的策動をめぐらし帝国主義的利益をつらぬいているのである。

2、3クウェート日本大使館占拠闘争は、シンガポール作戦貫徹過程で諸々の反革命策動をめぐらした日本帝国主義政府の対応を糾弾し、昨年十一月二十二日発表した「新中東政策」なるものの欺瞞性

をあげ出したものであり、1・31・2・6闘争は、帝国主義者・シオニストの拠点・反革命包囲網に対する攻撃の一環であり、パレスチナ・アラブ・ベトナム・インドシナ人民・全世界のプロレタリアート解放へ向けた正当なる闘いである。

日本帝国主義者は、シェル製油所襲撃爆破闘争の情報がシェル石油・シンガポール日本大使館を通じて外務省に伝わるやいなや、羽田空港、シェル石油日本支社、そして日本の革命兵士を不当に拘留している東京拘留所、中野刑務所を始めとして、全国二千名以上の機動隊を配備すると共に、「犯人割出し」と称して佐々警察庁外事課長と大高警視庁警備部参事官をシンガポールへ派遣し、また革命兵士を射殺せんという意図のもと偵察警察官を同行させたのである。あの偉大なる5・30テルアビブ・リッダ空港銃撃戦、7・20日航機日・J爆破闘争以降、革命兵士の国際的団結・共同軍事行動に恐怖している日帝は、ICPO(国際刑事警察機構)をはじめ、各国秘密警察と連携したうえでその弾圧を強化している。昨年十一月タ

イのバンコクで開催された、アジア学生国際会議に参加しようとした京大同学会の同志の強制送還、そして本年一月、我々の同志の強制送還などはその一例である。

今回の闘争に關しても、二月一日、日本赤軍とPFLPの共同声明が発表されるやたちだちに二日、大阪の新左翼社を被殺者不詳、強盗・逮捕・監禁容疑という全く不当なる口実でもって捜索し、同時に国際電々(KDD)料金センターをも捜索したのである。KDDに対する捜索は、日帝ブルジョア憲法の第21条「通信の秘密」にすらふれるものであり、我々はこの様な弾圧を絶対に許してはならない。そして四日には、我々の同志を不当検束し、五日には新左翼社

(東京)、我々の事務所、同志の自宅二ヶ所を前述した容疑で不当捜索したのである。

同志・友人諸君!

日帝の本質は明らかである。「人命尊重」とはさながら革命兵士を射殺しようとし、欺瞞的な外交政策をひっさげてパレスチナ・アラブ人民をあざむこうとしても、その本質は帝国主義者としてのものであり、シオニストと結託したものであることを全世界の人民は知っているのである。プロレタリアートは、帝国主義者、シオニスト共が全世界の人民を抑圧している限り、奴らに対する攻撃の場所や時を選ばないし、全世界を戦場とする闘いに何の躊躇もいらないのである。

プロレタリアートは、「抑圧された人民の言葉は銃であり、その表現は武装闘争である」ことを自らの実践によって明らかにするのである。

日本赤軍・PFLPによる共同軍事行動万才!

帝国主義・シオニスト・アラブ反動派打倒!

世界革命戦線の進撃万才!

世界革命戦争勝利!

二月十二日

## アラブ・パレスチナ革命連帯・不退転の武装闘争を!

世界革命戦線情報センター

先ず初めに、日本赤軍I.P.F.L.Pの共同軍事行動、シンガポール・ブクム島、シェル石油基地爆破襲撃闘争、在クウェート日本大使館占拠、英雄兵士奪還の勝利的な貫徹を断固支持連帯して祝したいと思えます。

この連続武装闘争がきりひらいた、世界革命へ向けた革命戦争派の新たな質は、米帝を初めとする世界帝国主義者ども、国際ユダヤ資本を初めとする国際石油資本(メジャー)及びその策動指揮下の反動・反革命分子どもをふるえ上らせ、中東石油資源に群がる新植民地主義者ども、世界の憲兵を自認する米帝国主義軍隊を初めとする反革命軍どもの兵站線(石油ルート)をアジア、パレスチナ人民が自らの意志でたち切つてみせることができることを、全世界の被抑圧人民の前に明らかにした。

この新たな武装闘争の開始は、アジア、アラブ人民の、世界革命へ向けて前進する革命情勢の真実であり、全ての被抑圧人民へのメッセージであるとおれわれは考えなければならぬ。

何故なら、この闘争を通して、アジア人民への、パレスチナ人民の炎の意志の表明が語られているからである。中東・アラブ・パレスチナ人民は革命の意志に燃えている、それは、あの「二つ、三つ

のベトナムを」と叫んで真の国際主義者「プロレタリア国際主義の栄光の旗のもとに闘い、たおれたゲバラの思想を継承し得ているパレスチナ解放闘争の現実が燃えている」などと手ばなしで傍観することはできない。世界革命の炎を全世界に向けて噴き上げているのである。それは、一貫して「アラブをヘノイに」の合言葉のもとにPFLP(パレスチナ解放人民戦線)が、一九六七年以来テレーゼし続けてきたアラブ民族解放闘争とパレスチナ解放闘争の結合環、アフリカの民族解放闘争とパレスチナ解放闘争との結合環の形態、PLO(パレスチナ解放機構)というアラブ、パレスチナにおける連合戦線にとどまらないANF(民族統一戦線)への実質的な、全世界的な解放戦線機構の創出(潮流化するパレスチナ・アラブ人民大衆の意志の結果が「炎」となって燃え上がり始めたことを意味している。世界中を火の海に化そうとしている。

☆

昨年ぼつ発した第四次中東戦争も、その一つの現われである。しかし、反動アラブ諸政権は、自らのパレスチナ解放闘争への反革命性を隠べいするために、アラブ民族解放の「大義」を、パレスチナ解放という「大前提」のたな上げによる「石油武器論」なる形式

論理にねつ造し上げることによって一國主義のわくを一步も踏み越えようとはしていない。そして「またもや締結される和平」は、一九四七年の国連決議「パレスチナ分判案」の承認である。

何故、アラブ連合軍が、反革命イスラエル軍国主義に勝てないのかという巷の愚問は、米帝と国際ユダヤ資本とソニオニズムとイスラエルという帝国主義の環の存在が丸となってアラブを収奪している敵だからだということを知れば水解する問題である。しかし、何故、アラブ民族の解放とパレスチナ解放が一元化しないのか。何故アラブ反動政府は、パレスチナ解放に敵対するのかわかっていることを問うことこそが、今、燃え上っている、アラブ、パレスチナの革命の炎の本質を見極めることであり、中東における現実の問題である。

本来、パレスチナ解放闘争は、英仏植民地主義と闘うアラブ民族解放運動の中で闘われていた闘争である。しかし、英米仏の後押しするユダヤ人移民政策と「イスラエル（ユダヤホーム）」建國とアラブ民族国家独立とを離反させることによって達成可能となったアラブ諸国の民族主義政府は、その存在のためにはすでに政権樹立以来「パレスチナ問題」を一たん植民地主義のターゲットとして死に渡してしまおうという歴史を繰り返して来た。その結果、エジプト革命が一步前進するたびに、植民地主義者たちはイスラエルを軸とする反革命軍の派遣でこれを抑圧しようとした。（一九五六年、スエズ運河国有化と同時に、イスラエルのシナイ半島侵略、イギリスフランスのエジプト上陸。）エジプトとシリアのアラブ連合結成すら抑圧された。（一九七三年五月、反革命軍によるレバノン内戦と反動政権の樹立。）イラクの革命のけん制（同年七月、米帝のレバノン上陸、英軍のヨルダン侵攻）。つまり、全アラブの民族主義革

命は前進するどころか、ソ連のイスラエル承認（一九四八年）にみられるように、パレスチナ解放を十重二十重に封殺しながら、遂には、英米仏によるヨルダン王国などのかいらい政権すら生み出してゆくのである。

☆

三次にわたるイスラエルの領土拡張軍事行動の犠牲になったパレスチナ人民は、近隣のアラブ諸国への死の逃避行を繰り返した。のみならず、その近隣諸国内では、ヨルダン王フセイン、及びレバノンの反革命弾圧下でパレスチナ人民は更なる死に直面し続け、ナセル反動政権下では解放闘争はおろか難民としての身動き一つ自由には出来なかつた。四百万のパレスチナ人民は死に絶えんとしていた。だが、カナン語で「闘う勇者」を意味するというパレスチナ人民は、一九六四年、ついにPLOを結成し、アラブ諸国に点在する人民の力を結集し続け、（六五年アルファタの武闘宣言。PLOの結成）、ついに一九六八年三月二日、買弁的なアラブ諸国から独立したゲリラ隊九千が、四万のイスラエル正規軍をアル・カラメで撃退し、強盗国家「イスラエル」への日常軍事戦闘を開始し、一方では、リビア革命（一九六九年）の成功を情勢としながら、今日にいたっている。

☆

その間、アラブ民族主義国家及び反動政権は何をしたか。一九七〇年、非妥協的日常闘争でイスラエルに捕えられた戦士を奪還すべくPLOの旅客機四連続ハイジャック闘争を契機に始まったヨルダン内戦においても、各国政権の援助と引きかえに、思わくをも背負ったPLO正規軍（PLA）をヨルダンから召還させ、

多くの革命的戦士を死させた。（この時のヨルダン政府の弾圧を忘れまいとして、アルファタ内には、黒い九月軍団が分離して結成された）。ヨルダン内戦も三度闘われ、遂にはヨルダン・イスラエルの反革命連合軍がゲリラを一掃するための大侵攻に出た。ジェラシの戦い、が最後になってしまふ。その時も、アラブ諸国は、全てを黙殺し、PLAは骨抜き軍、（パレスチナ人民は、かげで、ブラステック・アミーグと呼んでいる）になり、PLOの代表部は、アルファタ派のヤセル・アラファト議長を中心とする右派と、権派と、PLOから脱退して、非妥協的日常武闘を主張するPFLP等の主流派とに大きく二分してしまふのである。

そればかりか、アラブ各国は、自らのアラブ反動政権の存在すら危くするという理由で、パレスチナゲリラの武装闘争を抑圧管理するための「カイロ協定」が右派との間に締結され、パレスチナ難民救済の命題を引きかえに「難民キャンプ地以外での武器携行を一切禁止する」ことを余儀なくさせる暴挙に出たのである。

米英仏の帝国主義コンビネーションによる「イスラエル軍事政権」の強化は、その間に五倍増、十倍増を続け、ソ連派の胎動とアラブ反動派、ソ連派の共闘として分離を繰り返すアラブ諸国とイスラエルの軍事・経済上の戦争は、目をおおうばかりの惨状をアラブ側にもたらし、アフリカにおける米帝とイスラエル新植民地主義の侵攻を思うままに放置させる結果となつて、これまた今日にいたつてい

る。パレスチナゲリラの聖地「ジェラシ山」及びゴラン高原は、イスラエルに占領され続け、追われたゲリラ兵士の前にはイスラエル軍と同様にレバノン政府軍が銃口をつきつけるありさまが一九七一年

以来続くのである。

しかも、敵発的な「イスラエルへの逆侵攻」を繰り返すしかないゲリラの日常戦術展開をみて図に乗ったイスラエル軍と秘密警察はアラブ各国、ヨーロッパ全土のパレスチナ解放闘争の兵站線をたたき、都市ゲリラとしての戦力を一掃しようとしてICPO（国際刑事警察機構）と結託して、政治局員、情報部員への白色テロ、暗殺を企てたのである。全アラブ、ヨーロッパ各国の武装闘争派も、遂にその暴挙と自らに荷せられる弾圧の前に立ち上り、西独赤軍を初めとする武装革命派の国際的な連帯抜きには、各国帝国主義（国際ユダヤ資本と世界シオニズム）と世界帝国主義の反革命同盟軍を打倒しきれないことを、身をもって知つたのである。

☆

その、世界的な革命情勢の進撃を具体化したのが、一九七二年五月の日本赤軍とPFLPの共同軍事行動によるテルアビブ銃撃戦であった。そして、その潮流は、ミュンヘンオリンピック遊撃戦、パンコク闘争、ヘルツォーグランド闘争等へと受けつがれ、七三年、日本赤軍一被占領地域の息子たちによる日航機HJ爆破闘争を勝利的に貫徹し、今回のシンガポールクーデット連続遊撃戦へと戦いつがれているのである。

ヨルダン内戦時に、パレスチナゲリラの大進撃を恐れてヨルダン革命を封殺したアラブ反動諸国政権、昨年のレバノン内戦時にパレスチナ・アラブ人民の社会主義革命が全アラブにひろがることを恐れて反動アラブ政権への新たなテコ入れをした米帝、ソ連社帝も、第四次中東戦争を契機に、先に上げたANF（アラブ民族統一戦線）が反動政権を否定した人民レベルの革命的連帯をつくり出している

今日の状況を認めないわけにはいなくなっている。PFLPを初めとする非妥協のパレスチナ解放闘争の大道が、アラブ・パレスチナ人民の固い意志で、不屈に押し進められていることを黙殺することは出来なくなっている。そして、その真のパレスチナ解放へ向けた戦いを続ける、PFLP、黒い九月軍団、被占領地の息子たち、パレスチナの鷹等の武装遊撃戦争が、真のパレスチナ、アラブ人民の意志を代表していることを認めないわけにはいなくなっている。したがって、シंगाポール・クウェート連続遊撃戦争には、パレスチナゲリラの中でもあの隠健派とみなされていたアルファ派までが「連帯支持声明」を公然と出すにいたっている。石油武器論で国際石油資本と二人三脚を組むアラブ反動諸国は、アラブの大義というエゴイズムに「パレスチナ解放」の大前提をつきつけられて口をつぐんでいいる。中東石油資源に群れる日帝を初めとする経済大國、新植民地主義者たちは、ノド元にかみつかれて身動き一つできなくなっている。

★

世界革命へ向けて燃えるアラブ・パレスチナ人民の意志を代表したシंगाポール・クウェート連続遊撃戦争万才！

日本赤軍・PFLPの連帯した共同軍事行動を初めとする、世界革命戦争派の進撃万才！

そして、日本の革命的人民とアジア、アラブ人民の連帯万才！

この新しくきりひらかれた武装闘争の質を受けつぎ、更なる遊撃戦争を勝ちとり、世界革命戦争の大進撃を勝ちとるべく、不退転の日常闘争を続けよう。

一九七四年二月十五日

世界革命戦線情報センター

## 4. 14 集会へのアピール

アラブ民族解放闘争と共に闘う、パレスチナ革命闘争の現実は、敵対世界帝国主義・シオニストとの非妥協の闘いを日々勝利しつつ続けていることを熱い心からの言葉でまず報告します。

十月中東戦争を闘ったアラブ人民の革命への意志は不滅であり、その闘いの最中に悪企みを計った修正主義、妥協主義者たちは、非妥協の人民戦線を構築したアラブ・パレスチナ人民の闘いの前で、世界帝国主義・シオニスト共と一緒に露上っている。

勝利するパレスチナ革命の最前線では、今、「敵は誰か、味方は誰か」を選別するのにとまどう必要がある人民、兵士は一人としていない。「パレスチナ革命に勝利を、パレスチナの解放を」という闘いのスローガンを片時も忘れる者は一人もいない。

もちろん、我々パレスチナ解放人民戦線は、そのアラブ・パレスチナ人民による非妥協の持久的人民戦争の陣型を構築すべく、全ての革命の困難と闘い、敵対世界帝国主義・シオニズムとの戦争に全力をかたむけて来たし、今後も闘い続けることを誓っている。

そして、テルアビブ統率戦争と共に闘って以来、共同軍事行動を不折に展開している日本赤軍の同志たちを筆頭に、共に闘う決意を連帯した多くの同志達は世界中で闘い、そして勝利している。帝国主義者、ファシスト、反動主義者、修正主義者達に死をもたらしている。今や、我々、我々、パレスチナ解放人民戦線は、世界の同志たちとともに、世界革命の第一歩、パレスチナ革命の勝利を確信している。世界革命戦争の勝利を全世界の人民と共に勝ちとる決意である。

先のシंगाポール・クウェート連続武装闘争は、アラブ・パレスチナ人民の闘いが、共通の敵・世界帝国主義者共を打倒するために十分な共同軍事行動を展開できることを、日本の人民・アジアの全人民・アラブ・パレスチナ人民の前で明らかにした。

### パレスチナ解放人民戦線国際委員会

シंगाポール・クウェート連続闘争で勝ちとったアジア・アラブ・パレスチナ人民の固い連帯の意志を更なる闘いへと組織することを、ここで確認しようではないか！

我々、パレスチナ解放人民戦線は、日本の人民とともに、共通の敵、米帝・日帝を筆頭とする世界帝国主義者を打倒するため、闘いを用意している。武器を、兵士を送る用意がある！

そして、プロレタリア国際主義の旗のもとに全力で闘うべく用意している日本の革命的な人民、同志たち！

共通の敵に向けた、真の人民の闘いを組織しよう！

5. 30テルアビブ統率戦争を闘った三戦士たちのように、7. 20日航機日・J闘争を闘った戦士たちのように、シंगाポール・クウェート連続武装闘争を闘った日本赤軍の戦士たちのように、我々もまた、革命のために何時、何処でも闘い、死ぬ用意がある！

同志たち！

最後の勝利を得るまで共に闘おう！

日本革命万才！

パレスチナ革命万才！

世界革命の勝利万才！

パレスチナ解放人民戦線国際委員会 一九七四・四・二

革命的人民・同志たち

我々は、シンガポール・シェール石油基地襲撃爆闘争——在クウェート日本大使館制圧闘争を闘ったパセル・エル・コーバイン隊、ガッサン、カナファニーニ隊である

日本とパレスチナの革命的人民の意志を闘いによって代表した世界革命戦争統一戦線軍の兵士である

全ての人民・同志たち

我々の闘いの勝利は、アラブ・パレスチナ・アジア・日本の人民の勝利であり、我々の闘いの貫徹は、日本革命、パレスチナ革命闘争の勝利まで、更に共同軍事行動を展開することによってのみ遂行されなければならないと確信している。

そして、我々は、その確信を、本集会へ結集された全ての革命的

赤軍宣言

1・31シンガポール石油基地襲撃斗争からクウェート日本大使館制圧斗争に至る十日間の武装対峙ゲリラ戦を、PFLPと共に闘い抜いた我々赤軍は、闘う日本の同志・友人にこの斗争宣言をもって、更なる前進を誓う。と同時に我々は世界革命戦争の地下武装対峙情勢を、更なる共同行動をもって、顕在化せしめ、共に闘い抜くことを闘う日本の同志・友人諸君に呼びかける。

として決定的重要性をもって体现された。そしてこの証は、連続的なクウェート日本大使館制圧斗争との結合によって、シンガポール石油斗争の意義を更に如実に世界中の人民の前に示したのである。十月中东戦争を契機として帝国主義政治に包摂された民族主義政権の人民抑圧機関としての顕在化と、同時に相互媒介的にパレスチナアラブ革命主体に顕在化した「民族主義」か国際主義かの、現在ツインメルワールド会議の決断は、パレスチナ「建国」を妥協政治によって帝国主義者からゆずりうけるのか、それとも人民の武装勢力によって非妥協にうちたてるか、今、二つに一つの選択がつけられている。

そして、帝国主義政治が、ソ連修正主義と共にくり上げた和平会議のテーブルでは、人民抑圧機関としての民族主義政権の手によって、パレスチナ問題が語られようとしている。一方、「和平」を実現することによって帝国主義マスメディアから「解放」をのみ得られたヴェトナム革命戦争は、更に不屈に更に功勢をもって非妥協に闘い抜かれていく。十二月二日には、ヴェトナム解放戦争兵士による南ヴェトナム石油タンク襲撃が成功裡に貫徹され、サイゴン反革命空軍陸軍のエネルギー源の半分を破壊し、すでにヴェトナム革命戦争が、南ヴェトナム反革命軍の心臓部において燃えつつづけていることを如実に証明した。

そして更に解放戦線の石油襲撃 1) 敵の兵站の破壊は、持続的に続けられ、呼応したアジア人民による石油基地襲撃は、フィリピン新人民軍、インドネシア革命勢力によっても、各国内で革命斗争の表現として着実に貫徹されつつづけている。

人民・同志たちへのメッセージとして表明したいと考えている

我々の更なる闘いは、米帝・日帝の反革命同盟の本質的な環である日米安保体制粉砕、日本革命戦争を闘う、日本人民の闘いへと今、再組織されるべきだと確信している

そして、その闘いはすでに日本人民の革命性の中で開始していることも知っている

革命的人民・同志たち

我々、アラブ赤軍は、以上の如く、闘いの現実を報告してメッセージにかえたい。

パセル・エル・コーバイン隊

ガッサン・カナファニーニ隊

アラブ赤軍

アラブ赤軍・PFLPによる1・31シンガポール石油基地襲撃斗争は、現代の世界帝国主義の政治的・軍事的・経済的・地理的生命線に向って、非妥協に闘い抜かれた高度な戦略としてのゲリラ戦であると同時に世界的な革命勢力の新たな再編と結合を目的的に追求した。世界革命統一戦線政治の高度な到達段階を証す現代革命の人民戦争陣型の着実な萌芽、プロレタリア共産主義運動の勝利的飛躍

我々の任務は明確である。帝国主義政治によって終らされようとする二つの戦場を、すなわちインドシナ革命戦場とアラブ革命戦場を、非妥協の人民戦争をもって不滅にうちかため、更に拡大させ終らされようとする戦場を一つにつなぎ、世界革命戦争を準備することこそ、先進国後進国革命勢力に課せられた歴史的な、そして共通の任務である。共通の敵が今、彼らの言葉で「和平」を叫び、インドシナのアラブの市場争奪をくり返している。例外にもれず、日本帝国主義は、中国との平和共存をもくろみつつ、アジア・アラブ人民に見せかけの援助を示すことによって、更なる侵略と抑圧の布石を敷きはじめている。日本刀による侵略の時代から日本帝国主義は今、技術という刃をかざしつつ、第三世界人民に対する抑圧を公然と開始しているのだ。

こうした動きは、人民抑圧機関としての民族主義政権と利益を分かち合い、技術と石油の交換という二人三脚によって、米帝との共同反革命体制を堅持しつつ独自の勢力拡大に向けて、長期的路線の転換を急速に促進している。この日本帝国主義の転換の困難を、国内において日本人民下部労働者階級に転化することによって、搾取形態を強めつつ、帝国主義利益を損わずに行われるが故に、インフレ物価高を更にまん延させ、強権的な警察権力によって、革命的人民の反抗・英雄的突出を予防的にしめ殺そうと奔走している。

この情況下における1・31シンガポール石油基地襲撃斗争、更には、この斗争を契機として連続されたクウェート日本大使館制圧斗争の意義は、次の様に確認される。

まず第一に、シンガポール石油基地襲撃斗争はヴェトナム革命戦争との実質的な連帯であり、有機的に結合したヴェトナム人民との

共同作業として存在していた。

我々によって選ばれた標的シンガポール・シェール石油基地こそ、ヴェトナム反革命軍に対する最大の軍事エネルギー供給源であり、ヴェトナム解放戦線の石油攻撃によって激減した反革命運動にとって、シンガポール・シェール石油基地こそ、その供給ストックの最大死活の位置を示していたのである。同時に、イギリス、オランダ合資によるシェール石油はパレスチナ革命における明確な敵対者としてシオニズムとの結合を公然と示して来た。このパレスチナ・ヴェトナムの眼前の敵を打倒し、パレスチナ・ヴェトナム革命戦争の共通の利益をめざした我々の斗いは正義である。

第二に、シンガポールが帝国主義利益の地理的戦略地点として存在し続けていることは明確である。アラビア湾、インド洋、マラッカ海峡に至るアジア向け石油の政治的中継地点であると同時に、国際共産主義運動の、革命的武装対峙戦を闘い抜く、アジアの革命的人民に対する圧殺拠点として存在しているのである。

タイ労働者学生の英雄的反帝斗争、カンボジア、ヴェトナム人民の武装攻撃、フィリピン人民、インドネシア人民の反帝反動斗争が、インドシナ全域に燃えつづけている現在シンガポールこそ、帝国主義者にとって唯一の強固な反革命陣地であるのだ。イスラエル・シオニズムと結合したシンガポール政府軍はイスラエル国産武器ガブリエルを購入しているばかりか、シオニズム反革命から軍事訓練を受けることによってインドシナ革命の中で、米帝シオニズムの手先として、地理的戦略的な反革命の役割を演じてきた。このシンガポールに、我々抑圧された人民の戦場を創出することこそ問われているのだ。

なく日本独占企業のために確保し、日本独占企業によって商品化された物資をもって、侵略を更に深める日本帝国主義に対する我々の返礼である。田中訪アジアによっていみじくも表現された日本帝国主義の経済侵略の本質は、斗うタイ、インドネシア、フィリピン等のアジア人民の抗日戦線を拡大し続けている。

この情況下における一連の斗いは、日本帝国主義本国の革命主体としての我々と、日帝の搾取を日夜受けているアラブ人民、アジア人民によって共通に斗われたが故にアジアにおける反日米帝斗争を軸に、拡大発展する国境を超えた共同行動の方向を示している。

そして第六に、主体の側からいえば、世界革命をめざす世界中の革命勢力に対する世界革命統一戦線構築の呼びかけの斗いであると同時に、アジアにおいてアラブ・日本戦士によって斗われ、アジア人民の強い絆と支持のもとにもたらされたこの一連の斗争は、世界のプロレタリア革命運動の自力更生の斗いの方向性、すなわち現代人民戦争のプログラムを急速に描きはじめている革命的潮流の現実認識を示すものとしてあった。これらの点をシンガポール石油基地襲撃斗争の前提的意義として確認すると同時に、クウェート日本大使館斗争を経た総括的意義としても同時に我々は確認する。

我々の目的は、シオニビジネスではなく敵の石油基地を全面的に破壊することであった。この非妥協な軍事的制圧、経済的ダメージを与えることこそまさに現代の革命戦争を表現し、不屈の抑圧された人民の意志の証しとして存在しているからである。

しかし、我々の斗いはこの目的を貫徹しえず、敵の石油基地全破壊に至らなかった。にもかかわらず今回のシンガポール石油基地襲撃斗争は、勝利として結着した。確実な政治的勝利として結着した

第三、非妥協に闘い抜かれた十日間におよぶ斗争表現は、我々抑圧された人民の政治的表現としてあった。すなわち、妥協主義者、帝国主義と復讐するための手段としてのみ仕組まれたアラブ民族ブルジョアジーの石油供給ストップのドーカツに対し、我々革命勢力の手段が非妥協な敵の破壊にあることを指し示す斗いとしてあった。彼ら民族ブルジョアジーは妥協のために、そして我々抑圧された失うべき何も持たない人民は非妥協の戦士としてのみ、石油について語ったのだ。民族主義ブルジョアジーは、英・米帝・シオニズムに打撃を与えるアラブ資産外貨の銀行引き上げには手をつけず、石油ドーカツのみに終始した事実をもってしても、民族主義政権が彼らの利益の貫徹として石油を道具に使っていることを示していたに過ぎない。

彼らにとってパレスチナ問題はひとつの商札に過ぎないのだ。その商札になることを認めることが権利の回復だと吹聴するのはアラブブルジョアジーと、パレスチナの右翼反革命のみである。我々、十月戦争の不滅の続行を叫ぶアラブ・パレスチナ人民と共にその意志を表現する石油基地の完ふなきまでの経済的・軍事的破壊をめざしたのである。

第四に、歴史的に資源を独占してきた帝国主義企業に対する我々の挑戦である。植民地侵略によって収奪搾取をもって人民抑圧の上に築かれた石油メジャーを解体する我々の斗いは、正当な人民の権利としてあることを我々は確認する。

第五に、この一連の斗いは、日本帝国主義のアジア・アラブ侵略反革命政策に対する、我々世界の闘う人民からの容赦ない戦争宣言である。親アラブという口先の言いわけを通じて石油を人民には

のは何故か？  
それは、四戦士の不屈のプロレタリア精神によって非妥協に表現された戦斗陣型によって証明されたのである。日本帝国主義を始めとする密集した反革命によるだましうち、トリック等の試みははねのけ、不屈に不退転にスタンバイした戦士のモラルにある。

このモラルはすなわち、世界革命戦争を闘い抜く我々の陣型の中で一步／＼培われた現実認識が生み出したものに他ならない。そして、このモラルと同質に結ばれた赤軍PFLP残留部隊によって、敏速に練られたクウェート日本大使館制圧の連続的攻勢は日本帝国主義を始めとする反革命の試みを敗北せしめたのである。クウェート日本大使館制圧は、敵と味方の力関係を逆転させることによってすべての同志たちを再び戦場へ生還せしめたのである。

ここで我々は身をもって一つの教訓を獲得した。攻撃こそ、非妥協な攻撃こそ日本帝国主義・世界帝国主義シオニズムに対する我々人民の防衛手段であることを。我々は闘う戦士の不屈の同志連を軸に困難を我々の有利へと転化した。それはただ敵に向って放たれた我々の革命に対する実在を賭けた忠誠であり、シンガポールとクウェートで共通に抱かれたそのカテキズムの堅持であった。そしてこのカテキズムは、敵と闘うという現実において、敵と闘うという現実認識によって、必然的に整えられる隊伍が生み出す質、すなわち世界的な広がりをもって進行しつづける世界革命をめざすあらゆる戦線の統一過程をふみこえている我々や、多くの同志戦士達の共産主義運動の現実の姿である。

日本の同志友人諸君、敵と闘うという現実において共に隊伍を整えよ、敵と闘う現実こそ人民に向って開かれた党派斗争であり、

思想戦・組織戦としてあるのだ。我々抑圧された人民の防衛は、敵に対する攻撃にある。我々は今、勝利の確信をこめ、日本の斗う同志・友人に共通の斗い、共通の革命戦争を共に担うことを呼びかける。

日本の斗う同志・友人諸君！我々は日本の内と外で、共通の敵に向って共に斗い抜くことを更に約束する。そして日本の戦士諸君、日本の革命戦争、世界革命戦争を共通に担う隊伍を更に組もう。我々は多くの戦士諸君が我々の基に一人でも多く到着することを心から待っている。出合い、共通にわかちあう戦場から再び、日本革命戦場へ、世界革命戦場へ向う我々と、新たな戦士たちの斗いは、日

## 5. 30 集会へのアピール

二年前のきょう、同志パーシム、サラヘ、アハマッドの三戦士は、帝国主義・シオニズム・アラブ反動派に対するパレスチナ人民の闘争に連帯するべく、イスラエル占領地のリツタ空港へと足を踏み入れた。

彼らのこの闘いは、反帝国主義の闘いが全世界にわたって強く結ばれている、そのまぎれもない事実をはっきりと証明したのだ。彼ら三人の日本人戦士は、そのリツタ空港における英雄的な闘いが、彼らの生命をかけるに値する革命的任務であることを十分理解していたにちがいない。そして、彼らの強固な意志は、彼らの闘いがパレスチナ人民と日本人の帝国主義打倒に向けた革命的連帯の強い絆となることへの確信によって裏うちされていた。

指導者であり、中央委員会のメンバーであったバセル・エル・コーバインとサディーク・アス・サディーク。この他にも多くの同志が闘いの中でイスラエル・シオニストの手にかかってきた。

昨年十月以来、敵イスラエル・シオニストは敗北に敗北をかまねてきた。しかし、アラブ反動派はこの数限りない同志の革命的な闘いによる成果を、彼らが「中東和平」と称する、アラブ、イスラエル間の闘いの「平和的解決」のデッチ上げに利用しようとしてやっきた。彼らがいくらかわめこうとも、こうした試みがパレスチナ人民の正当な権利を無視するものであることは明らかであろう。彼らのいう、ヨルダン川西岸とガザ地区における「パレスチナ国家」の持つ本質は、イスラエル・シオニストの一九四八年の侵略を承認する、イスラエル、そして帝国主義のカイライ国家のデッチ上げであることをはっきりと見抜かねばならない。そして、それこそパレスチナ解放運動の任務を導く彼らの陰謀であろう。私達PFLPは、こうした視点に立って、いわゆる「ジュネーブ和平会談」やヨルダン川西岸とガザ地区における「ミニ国家」案を断固として拒否して

## アピール

本日のリツタ闘争二周年集会に結集した闘う同志諸君！  
共通の敵に対する更なる闘争の継続こそが、熱い連帯の証しであることをまず我々は確認し、共に闘う同志、友人に心からの集会アピールを送ります。そして、リツタ闘争以降、共に我々の隊伍となつて、力づく我々の闘いを支持支援している諸団体、同志友人に心からの感謝と連帯を送ります。

本——世界の交通形態を着実に地球の深部に構築されるであろう。戦士諸君、国境を越えて結集せよ。我々はどこでも戦士諸君を迎えるであろう！

そして最後に日本ブルジョア諸君！

我々は君達の絶望的な統治形態を一つ／＼着実に破壊することを、更に大胆に押進めることを宣言する。我々は世界中の斗う人民の戦列の一つを担い、あらゆる君達の死角から戦争を続行する。我々はただ抑圧された人民の正当な意志を証明し続ける。我々は、不屈に執拗に解放を求めるが故に、君達の我々に対する弾圧とその強化が、我々の戦列を強め、鍛えるだけであることをはっきりと宣言しておこう。

## パレスチナ解放人民戦線

この英雄的な闘いから二年が経過した。私達は、きょうの日に際して、私達の闘いの発展を今一度振り返ってみたい。まず最初に述べねばならない最大の点は、帝国主義・シオニズム・アラブ反動派の一体となったパレスチナ人民の闘いへの任務攻撃にもかかわらず、私達の闘いはますます前進しつづつあるということです。この事実は、次々と大きな犠牲を強いられつづつ前進するアラブ人民の、強固な決意と深い確信によって可能ならしめられている。

私達が失った犠牲の中には数多くの同志の生命すらも含まれていた。PFLPの公式スポークスマンであり、政治局員であったガッサン・カナファニー、ガザ地区におけるPFLPゲリラ組織の指導者であり、政治局員でもあったゲバラ・ガザ、占領地域三角地区の

きた。私達がめざす、パレスチナにおける民主的社會とは、あらゆる差別と抑圧のない、そして宗教、国籍を問わずあらゆる人民がこの民主的社會の建設に参加できるものでなければならぬ。私達は、そうした民主的社會へ向け実現に闘いつづけるであろう。たとえ、いかなる障害に直面しようとも、いかなる犠牲を強いられようとも、私達の闘いが勝利の日まで続けられるであろうことを私達は確信している。

今は亡きパーシム、サラヘそしてとらわれの身となったアハマッド同志の英雄的な闘いを再度振り返り、パレスチナ、日本人の共通の敵である米帝国主義とその追従者打倒への更なる決意と、強固な連帯を確認しようではありませんか。

プロレタリア国際連帯万才！  
全世界の反帝勢力の団結万才！

パレスチナ人民と日本人との絶えざる連帯万才！  
我々は必ず勝利するぞ！

一九七四・五・三〇

## 赤軍

今、リツタ闘争の切り拓いた意義が、歴史の経緯の中で、ますます明らかになってきています。4月のPFLP・GCによる断乎とした被占領地内武装対峙戦にひきつづき、この集会より二週間前PFLPの同志三名による被占領地内武装対峙戦は、リツタ闘争以来熱望されていたパレスチナ人民の非妥協な戦闘の現実化としてアラブ人民の中に新たな希望を深めています。エジプトを中心とする右翼民



族主義政権の帝国主義、資本主義への巡回は、パレスチナ人民、アラブ人民を抑圧、搾取する体制を強めるのみならず、シオニズムの人工国家を認める「和平工作」と一体であるが故に、国内矛盾を増殖し、不敵のパレスチナ革命への希求を引き出してきたのです。この希求を実現する唯一の道は、パレスチナの革命戦場を拡大すること以外には、存在しません。果てしなく革命戦場を不断に拡大することの非妥協の陣型こそ、真のパレスチナ解放を克ちとるもつとも困難な、そして、もつとも近道として、世界革命の最前線陣地としてよこたわっています。

今回の、PDFLPの同志諸君による同志奪還闘争に対し、シオニストの子供たちを自らが銃撃、見捨てることによって、闘いを妨害し、「報復」という口実によって、レバノン国内を即日襲撃し、四十数名を殺害したシオニスト・イスラエルは、同時に更に深い国

## ア　　ビ　　ー　　ル

リッダ空港の記念日に際して日本の同志たちが参加し、われわれが誇りとしているこの戦闘は、自由の問題が世界中至るところで起っていることを示しており、さらにまた帝国主義に反対する人民の利益と幸福のために進められねばならないことを示しています。

我々の革命の全ての戦線に戦っている同志たちは、日本の同志たちに挨拶を送り、尊敬の気持を表明します。

われわれの同志たちは岡本公三が彼の同志たちのもとに戻り、世

内国外矛盾を自らが生み出し、一步一步墓場への退却を余儀なくされていきます。我々は、革命的勢力と手を握り合い、更なる任務——共連の敵シオニズム、帝国主義打倒の闘いをひきうけることをここに誓います。

同志諸君戦場で握手を！

リッタ闘争万才！

第二、第三のリッタ闘争万才！

人民の団結万才！

帝国主義者に死を！

シオニスト・ファシストに死を！

5・30リッタ闘争集会にむけて

一九七四・五・二〇

## パレスチナ解放人民戦線総司令部派

界の帝国主義とシオニズムに反対する斗争に再び参加出来るよう彼の解放のための闘争を続けることを約束します。

我々は日本人に挨拶を送るとともに、日本人とパレスチナ人民の友好を誇りに思っています。我々PDFLP・GCC(総司令部派)は帝国主義とシオニズムに反対する国際的斗争に挨拶を送ります。

中央委員会委員　フアダル・シュール

五月二十一日

# パレスチナ革命の現段階

## 世界革命戦線情報センター

昨年の第四次アラブ解放斗争以降、パレスチナ人民の権利と立場を全く無視したうえで米帝とソ連修正社会帝国主義のなほ崩した中東和平策動が、ウエストバンク・ガザ地区における「ミニ・パレスチナ国家」案という様相を呈しながらの反革命的陰謀が展開されている。しかしながらアラブ・パレスチナ人民によるアラブ・パレスチナの武装解放斗争は解放勢力の党派斗争を孕みながらも断固として展開されていることを第一に確認し我々は彼らの斗争に固く連帯したあらゆる斗争を組織するというプロレタリア国際主義的見地から昨年の十月以降のアラブ・パレスチナの階級関係・階級分析をおこなっておく必要があるだろう。

昨年十月以降のパレスチナの階級情勢の第一の特徴は、米帝とソ連社会帝国主義による平和共存政策に基づいた中東和平策動である。ヨルダンのフサイン政権・エジプトのサダト政権等、アラブ反動派を巻きこんだ形での、「中東和平」策動は本年一月十八日にエジプトIIイスラエル両軍兵力引き離し協定、そして五月三十一日のイスラエルIIシリヤ両軍兵力引き離し協定、締結として展開されている。しかしながら両協定が「平和協定ではない」としながらも「国連安保理三三八号決議にもとづく公正にして永続的な平和への一段階である。」(イスラエル・シリヤ両軍兵力引き離し協定)としているように、兵力引離し協定自体が国連安保理三三八号決議、そして三

三三八号決議の基礎となっている国連二四二号決議を一步たりとも出るものではなくその反革命性は明白である。つまり第一に国連二四二号決議たるものは「イスラエル」国IIシオニストの存在を許容し、パレスチナ人民をパレスチナの地から追い出したことを既成事実として認めており、国連二四二号決議にかなる粉飾をこらそうともその反動性は明白であり、一九一七年十一月のバルフォア宣言以降のシオニスト・帝国主義者の侵略と反革命を歴史的に正当化しようとしたものに他ならず、パレスチナ問題を一九四七年のパレスチナ分割決議に逆行させ、一九六七年段階の「境界線」トシオニストがパレスチナの土地に八十%の主権を持つ——に全て封じこめたるうえでパレスチナ問題を難民問題に解消しようとしたものであり、パレスチナ問題の根本的な要因を隠蔽しているのである。

(バルフォア宣言以降の問題は、昨年の十一・二パレスチナ革命連帯集会の基調報告に詳しい。)

エジプト・サダト政権は昨年の十月アラブ解放戦争以降右翼的体質を露わにし、ソ連派のイラク共産党からさえ、その「右旋回」ぶりを糾弾されている通り、サダト路線は、ナセル路線——親ソアラブ民族主義から反共アラブ民族主義への転落としてあり、必然的にパレスチナ武装解放斗争——民族解放社会主義革命戦争としてパレスチナ解放斗争を斗おうとするパレスチナ人民に対しての反革命と

して登場してくるのである。それはエジプト国内で主要ポストを占めていたナセル主義者の解任・反動派の登用・マルクス主義者への弾圧などを軸としたサダト政権の国内固めを基礎とし、又アラブ諸国内にあっては、ファシズムの小ブル急進民族主義者・リビア・カザフイ政権との対立を軸とし、アラブ諸国内における政治ヘゲモニーの確立を計るため、アラブ諸国内左派(イラク・シリア)への切りくずしとして政治的に頭を化している。つまりサダトは一月十八日のエジプト・イスラエル両軍兵力引き離し協定締結以降、アラブ諸国内での政治的ヘゲモニーの確立を米帝から奪与される「核」を中心として、ファントム・空対空・地对空ミサイルを含む兵器買付けなどでアラブ諸国内での政治的軍事的優位を打ちたて、ソ連派を追い落とす一方、サウジアラビア・ファイサルと結託し、O A P E C・アラブ諸国総体を右傾化しようとする試みとなつてあらわれているのである。キッシンジャー・サダトの秘密会談は、「イスラエル」シオニストの存在を容認し、ソ連のアラブ・パレスチナへの足場を失なわせ、メジャー石油会社(米系五社)とりわけロックフェラー系三社の利益を米帝の利害として貫徹しE C 帝国主義諸国の追いつきをはかろうとしているのである。

我々はサダト路線の右翼的路線は、米ソ平和共存体制のなかで一貫して調停的立場しかもちえなかつたナセル主義の必然的破産としてもおさえてはならないであらう。

またリビアはすでに商業新聞等で明らかにされているように「パレスチナ武装解放勢力に多くの援助を与え、世界各地の回教徒被抑圧人民に対する物質的援助を供与している」といわれている。一九六九年のリビア革命以降、カザフイ革命評議会議長の指導下にある

主義とは縁もゆかりもなくその本質は社会主義という衣をかぶった反革命イデオロギーであることを我々は確認しておかなければならない。カザフイの本質は、パレスチナ武装解放勢力のなかの左派ヘゲモニー、P F L P、P D F L P、P F L P・G C等、マルクス・レーニン主義を綱領に掲げた諸組織に対する弾圧に我々はそれを見ることが出来る。リビア・カザフイ政権は、アラブ反動派打倒の闘いと共、第二次的打倒対象として明確に我々は確認しておく必要があるであらう。

我々は再三明らかにしているように、パレスチナ地域で斗われているP L O傘下の各諸組織・とりわけP F L P、P D F L P、P F L P・G C、アル・サイカ、による武装斗争を断固支持する。

我々は「イスラエル」国内に於ける武装斗争を評価すると共に「イスラエル」国内におけるプロレタリアート人民との結合を計ろうとするP D F L Pの革命路線を積極的に評価したい。しかし我々はP D F L Pの同志達が米ソ平和共存体制を基礎とした「中東和平策動のなかであって、自らの斗争を右翼的に総括し、改良主義的に臨んでいることをみてとらなければならない。

それは第一にハワトメ議長自ら語るように、現在展開されている和平策動で提出されている「パレスチナ国家案」を受諾しようとする方向性である。我々はすでに述べたように現在提出されているパレスチナ国家案は、パレスチナ人民の武装解除と「イスラエル」国の存在を前提とされている点からしても国連二四二号決議の延長上にあるものと考え、P D F L Pのパレスチナ国家案受諾は「革命的勢力が基本的な民族的要求を追い求めるなかで、反帝国主義的・革命的的政策を

リビアは七三年以降、イスラム教義と、中国文化大革命の方法を接合した「文化大革命」と称する第二次的補足革命をカザフイ議長指導のもとに行い、リビア国内のメジャー石油施設の国有化をはじめとして、国内諸施設の「人民管理」国有化政策を行い、そして九月以降は「人民革命」を推進し、革命評議会の権力集中を強め、カザフイ・ジャハードの共同指導体制を強化する一方、外交路線の若干の手直しを行い、またモスLEM思想の徹底化による排外主義的思想弾圧(マルクス主義者・反カザフイ主義者への徹底した弾圧)を行っている。又国際的にはO P E C・O A P E C・回教国会議・非同盟諸国内における反帝諸勢力の一角を構成し、リビア・カザフイ政権の政治的位置が重要になりつつある現在、我々はリビア・カザフイ政権に対する批判・評価なりが若干たりとも必要であらうと考える。リビア・カザフイ政権はアラブ諸国内における小ブル急進民族主義国としての位置をしめ、その小ブル民族主義的傾向は、第四回非同盟諸国会議・O A P E C・回教徒会議などのリビア代表の演説にもあらわれているが、カザフイの指導路線はモスLEMにもとづく民族自決・民族統一であり、第四回非同盟諸国会議に於て、キューバ・カストロ首相との間で論議された「社会主義」をめぐる論戦で一定程度明らかになったように、カザフイの指導路線は「回教的社会主義」といわれるものである。カザフイのいう「回教的社会主義」とは即ち、所有形態が、回教の教義にもとづく共同所有という「社会主義」的形態をとりつつ階級を解消しようとするものであり、政治的には、イスラム教義を基本とした政治理念として、国家社会主義的色彩の強いものである、とりわけカザフイはファシズム的イスラム主義運動者で、彼のいう「社会主義」はマルクス・レーニン

採用させていくような国家について考えるべきである。」とされているのをみてもわかるように、権力問題の欠落・帝国主義及びシオニストの過少評価の傾向があり、パレスチナ国家を単なる政治的見地からしか扱えていないのである。

第二に、P D F L Pはアラブ世界に於て、その階級関係からして人民戦争が不可能であるとしている。彼らの考えによれば「ブルジョア的・封建的な諸政権は、人民のすべてが武器をとって人民戦争に参加することを怖れている」としたうえで「彼らは、民族解放戦争ならば認めることができる」という理由から人民戦争を否定し、民族解放——社会主義革命戦争を単なる民族解放斗争におとしこめようとしている点で彼らは二重の誤りを犯しているのである。すなわちパレスチナにあっては階級諸関係からして、民族解放戦争は、アラブ反動王国派打倒・帝国主義者・シオニスト打倒として必然的に、民族解放——社会主義革命戦争として斗われなければならない、又その斗いはパレスチナ人民の組織された軍隊による武装遊撃戦を突破口にした革命戦争——人民戦争として斗われなければならないのである。現段階においてパレスチナ人民の武装を否定し、人民戦争を否定するP D F L Pの路線は「イスラエル」国内の人民と正しく結合するという全く正しい路線にもかかわらず、致命的な限界性であることを我々は確認しておかなければならない。P D F L Pは六月一日から五日間カイロで開催されたパレスチナ民族会議の席上においても、アル・ファタ(右派)、アル・サイカと共に「パレスチナ国家案」受諾という解放勢力右派として登場し、P F L Pをはじめとする左派との党派斗争としてあらわれている。このようななかであって、パレスチナ人民の斗いは「イスラエル」国内の人民と

の革命的結合のみならず、全世界の革命的同志との結合をはかりながら「イスラエル」国内の主要施設爆破ゲリラ戦として展開される一方、プロレタリア国際主義を国境を越えた人民の軍隊の共同軍事行動として表現しようとする世界の人民との連帯を勝ちとりながら断固として前進しているのである。

我々は六月一日から開かれた第十二回パレスチナ国民評議会の十項目にわたる決議は、昨年十月以降の情勢を一定程度踏えたものとして、基本的に支持し、パレスチナ国民評議会の新執行部にPFLP・G.C.が参加したことを歓迎する。しかし同時に採択された決議案に一定の前置を認めつつも、PLOの持つ限界性として把握しななければならない。

世界革命戦線バック・ナンバー

第2号 遊撃戦争貫徹ノ ￥100

。戦闘宣言 アラブ赤軍

。「北帰作戦」の貫徹・勝利ノ

。赤1Pノ第二期全国上映

。ジョージ・パドモア覚え書 松田政男

第4号 不滅の最前線陣型をノ ￥200

。テルアビブ統率戦・5・30行動実行委総括

。5・30行動へのアピール

アラブ赤軍、PFLP国際局

PFLP日本人医療隊

第5号 アラブ・パレスチナ革命、アラブ赤軍

。7・20日航機H・J爆破闘争勝利ノ ￥200

。パリ共同声明 日本赤軍

S O L O

日本の戦士によびかけるアラブ赤軍

。パレスチナ革命の現段階・革命の任務

。パレスチナ革命の現段階・革命の任務

。パレスチナ革命の現段階・革命の任務

各号残部あり 申込先 裏表紙参照 (〒¥70)

## パレスチナ解放人民戦線第三回大会政治報告

訳注

以下の報告は「NEW STAGE OF TASKS」(PFLP外交委員会発行・一九七三・ペイルスト)の翻訳である。

全体は

- 一 序文
  - 二 前段階の体験をどう把握するか
  - 三 客観的要件
  - 四 抵抗運動の主観的要件
  - 五 抵抗運動の左派勢力
  - 六 一九七〇・九一―一九七一・七の戦闘
  - 七 九月以降の段階
  - 八 新しい現実で直面している新政治斗争
  - 九 新段階の任務
  - 十 現段階の為の綱領大要
- となつている。今回は(四)までを掲載する。  
翻訳の責任はIRF・ICである。

一、A序文

パレスチナ解放人民戦線第三回大会は一九七二年三月六日―九日まで、複雑かつ困難な主観的、客観的情勢の下で開かれた。つまり、

一九七〇年九月来、更に九月以降の抵抗運動対帝国主義の手先ヨルダン反動政権の一連の斗いによって、人民の革命斗争は以前よりも苛酷かつ困難な段階に突入したという事が明らかになってきたという事である。これは、一九七一年七月のジェラン及びアジールの斗いの結果によりはつきりと大衆の理解するところとなった。

こうした状況下における革命の任務とは、前段階の批判的意見を保証し、現段階の完全な把握と新たな現実の科学的分析とをそれに結合させる事である。次の段階に対処する革命の任務と綱領を決定せねばならぬのはこの分析と把握を用いてである。左翼組織としてPFLPは主要な任務が将来PFLPをどのように発展させていくのかという明確な視点を確立する事であると認識してきた。人民が目下直面しているような複雑な情勢に対処するには、自然発生的、場当りの、性急な冒険主義的やり方では駄目なのである。我々は、パレスチナ解放斗争とは何十年の才力を要する長期人民戦争であるとみなしている。人民の革命斗争以外に勝利への道はない。そしてそうした斗争は自ら斗争の中で成長してきた革命組織により領導されねばならないし、その革命組織は決して絶望しないプロレタリア的決意と革命的、理論的視野を立脚点としていなくてはならない。

以上の理由から、PFLPは今大会に先立つ数ヶ月を次の段階にどのように対処するかという点を政治指導部が提出した政治報告

と組織綱領の研究に努めたのであった。

PFLPの組織内に関する提案と政治綱領は、PFLP幹部から末端に及ぶ民主的討論の主題であった。こうした討論で提出された諸問題に照らして第三回大会が綱領を発展させ認可できるようにという予備工作であった。

第三回大会で特に主要だったのは、同大会で生れた政治報告、組織改造及びPFLPの組織内部規制に関する組織綱領であった。これらは全て、来たるべき次期段階にPFLPがどう立ちまわらうかについて総体的指導路線を形成しているものである。この次の段階とは我々が経てきた一九六七年中ばから一九七〇年中ばに至るあの時期より更に困難にみち、更に激しいものである。

この報告は、PFLP第三回大会で具体化したが一九六九年二月大会で発行された政治、組織綱領具体化の指針として公式に承認されたものである。そして来たるべき事態を分析、観察し、それを科学的立場から規定する基盤となるものである。更に、同綱領は我々の軍事、政治有効性全ての方向の基礎でもあらねばならぬ。当然、そうするにあたって我々はダイナミックな実践が明らかにした教訓や我々の過去の経験から大いに得る所がなくてはならぬ。

PFLP中央情宣委員会

※本第一回大会は一九六八年八月、第二回大会は一九六九年二月。

※水英語版で「パレスチナ解放戦略」という題で発行

## 二、△前段階の体験をどう把握するか▽

一九六七年六月の敗北は、パレスチナ武装抵抗運動の成長を加速

以上を表現してきたのは、一九七〇年九月と一九七一年七月の闘いを担ってきた抵抗運動である。(この二つの闘いの後)パレスチナ、アラブ人民大衆は抵抗運動が苦境に陥ったことを悟った。この苦境の中から革命の未来に対する疑惑、それまで大衆の希望を表現していた抵抗運動の實力に対する疑問が生じてきた。

一九七〇年九月のヨルダン内戦と一九七一年七月のジェラシ攻防戦を性急に分析しようとした部分があるが、そうした分析は抵抗運動が体験した弱さと退却の一次的・部分的・過渡的状況の予言はしたもの、それはこうあって欲しいという希望的観測の効果なのであって、大胆な科学的分析に最低限必要なものに欠けていた。そうした分析は客観的・主観的素因をもっと掘り下げるべきである。さもないと、それは抵抗運動の衰弱を強め長期化させるだけに終り、一九七〇年九月以前から全面的信頼を寄せたパレスチナ・アラブ人民大衆の隊列に絶望病を蔓延させるだけだ。我々の責任とはそうした事にあるのではなくして、新たな情勢に現実を踏えた視点で臨み、それを十分に理解把握し、抵抗運動が何故後退を余儀なくされたのかを認識する事にこそある。即ち、抵抗運動が現在の苦境から脱出できるように、再度活発になるように人民大衆の希望を代表し人民を動員し、人民が再び奮闘する闘いに決意も新たに立ちあがるような活動綱領創出の準備でなくてはならないのだ。

出発点は新情勢を受けとめる事の中に存する。科学的に系統づけられるなら、以下の二点に表現されるだろう。

一、最近になって以前とは比べものにならない位明確になってきた新客観条件。

二、抵抗運動の主観的条件

させるのに力となった新しい客観的条件を創出した。過去にあったは抵抗運動が対決してきたのは、最高潮に達し全盛期にあったアラブ民族主義政権とそのリーダー達という政治的現実であった。加えて、反動アラブ政権の手による抑圧と妨害に隷属させられてもいた。民族主義政府のもくろみと綱領の崩壊、又一九六七年戦争の敗北により彼らの権力が破滅した事は、ヨルダンで反動政権が完全ヘゲモニーを失い既成軍事機構、弾圧装置が解体した事と相まって抵抗運動の急速な成長につながった。六月敗戦のその他の客観的結果も考慮すると、敵をみきわめ、それとの対決を決意させ、そうして真の目的認識にパレスチナ・アラブ人民を導いた。

抵抗運動はパレスチナ大衆の中に革命状況を、そして総体としてのアラブ大衆の中に、政治運動感情のめばえをもたらしたが、それはアラブ解放運動に重大な意義を持っていた。又、それはシオニスト、帝国主義に一定程度の不安をかもし、ヨルダンの反動政権にとっては抜きさしならぬ脅威となった。歴史的に言うなら、ヨルダン政権は帝国主義がパレスチナに、更にもっと一般化するなら全アラブ世界に作った安全弁である。パレスチナ抵抗運動は、中東における権益存続を確保するようなやり方でパレスチナ問題解決をもくろむ帝国主義者にとっても大変な脅威でもあった。こうして抵抗運動は圧力をかけ、アラブ政権の無能無策ぶりを大衆の前に暴露してゆく実力を持つた勢力として登場してきている。以来、アラブ政権が代表してきた段階の終了過程を早め、そうして今度こそ、中東における帝国主義、人民の矛盾を、完全、根本的に終了させる力を備えた新階級に指導を受ける新たな革命段階確立への道をならしめてきた。

## 三、△客観的条件▽

a、ヨルダン反動政権

一九六七年六月戦争敗北後、ヨルダン反動政権は史上最弱になった事を知った。ヨルダン史とは即ち、大衆弾圧と対外的には帝国主義への完全依存と対内的には搾取勢力として成立してきたもの。

六月戦争に負けたのでヨルダンの既成軍事機構は崩壊し、ガタガタになった。イスラエルから鋭い軍事打撃を受けた事もあるが、ヨルダン軍事機構がそもそも初めから民族主義軍隊としてではなく、無防備の大衆を抑圧する公安警察的道具として成立してきた事にもよる。ヨルダン河西岸でちょっとした戦斗しかやらなかったから大した損害も受けていないのに、ヨルダン軍がかくも大規模に壊滅せねばならなかったのはこういう訳だからである。

こうした軍事機構崩壊に直面したヨルダン政府は(装備は破壊され、幹部は逃走、士気は影も形もない)仕方なく新聞広告を出し、軍隊に戻る兵士には二ヶ月分の給料を与えると発表。これは英帝国主義が、トランスヨルダン土侯国をデッチあげた時と同じ傭兵の原理を用いてヨルダン支配階級が軍再編に臨んでいる事を如実に語っていた。つまり傭兵を用いて大衆弾圧を行い、それによって権力の延命を保証していかうというのだ。

敗戦、ヨルダン河西岸を敵に占領された事、そしてヨルダン政権の轉動である長く血なま臭い抑圧の歴史は、何とか支持を勝ち取ろうとしたヨルダン政府の望みを全て粉々にしてしまった。ヨルダンは一九六七年六月参戦を声明して以来、ヨルダンに対する支持を弱めてきたのである。ところが、今となっては政府の精神的・道徳的弱さをさらけ出したにすぎなかった。ヨルダン軍事機構の崩壊が余

り進行したので、政府が大衆運動に対応する際存続してきたある社会勢力は抵抗運動に対する初期の斗いにどう対応して良いのかまごついたほどであった。抵抗運動はそのすきにヨルダン河西岸に生じた空白部分に素早く介入して行った。

ヨルダン反動政権は、我々はこれを敵陣営の一部とみなしているが、何度か抵抗運動を切崩さんと試みてきた。抵抗運動の主体的力量、人民の支持の度合い、アラブ民族の拮据に脅威を感じていたからである。しかし、毎度ヨルダン反動政権は思惑通りにいかず、却って逆効果を生ずるかもしれないという危惧から途中で攻撃・妨害の手を引こめざるを得なかった。

ヨルダンの反動政権を直接指導しているのは帝国主義者であって、帝国主義軍営の反革命専門家の直接指導を受けてきたのである。力の均衡を自己に有利に変えんとこの三年間、絶えず実基に基大な研究を為してきた結果、抵抗運動に一定の打撃を与えたのであった。ヨルダン反動は抵抗運動の機構上の重大なアキレス腱と、指導部のプチブル的性格を最大限に利用した。又、妥協的アラブ勢力と反動派とのライバル関係激化もヨルダン反動に幸いしたのである。

ヨルダン反動政権は一九七〇年九月の斗いで自己防衛を勝ち取ったにとどまらず、抵抗運動迫害、抵抗運動指導部の和解・妥協的戦術粉砕にも成功した。こうして、ヨルダン反動は一九七〇年九月から一九七一年七月の斗いを経てある勝利感を味い、ヨルダンから公然とした抵抗運動を一掃し、ヨルダン・パレスチナ人民大衆抑圧機関として再度支配を開始したのである。

現在の的には、この反動政権の軍事力は七万位。装備は最新型米国製。中には対ゲリラ戦の特殊訓練を受けた者もいる。この七万の軍上げ、抵抗運動破壊の斗いにそれを利用して成功している事。ヨルダン反動はこの「ヨルダン人意識」を依りどころとしている。我々は以上の特徴を十分理解せねばならぬだろう。さもないと、今の苦境からの脱出を科学的・正確にかちとる事はできない。

#### b、帝国主義のもくろみ

帝国主義がそもその初めから抵抗運動を要注意の危険とみなしてきたのは当り前だ。その要注意というのが抵抗運動の規模と当時における有効性という観点からであったのも当然。つまり、当時イスラエルが抵抗運動をどのように把握していたのかという事を基盤にした用心深い監視の眼であった。当時イスラエルは数ヶ月で抵抗運動など跡かたもなくしてやれるとか、少なくとも中東におけるイスラエルのシオニズムにさしたる影響を与える事なく、抵抗運動が細々と延命するだろう位に考えていた。

こうした把え方は帝国主義が大衆の運動に与える評価に根ざしているのは明らかである。アラブの正規軍があれ程の打撃をこうひったのだからそれで大衆も頭うちになるだろうし、一九六七年軍事力行使によって作りあげた現状にとって、抵抗運動は不した脅威とはなり得まいとふんでいたのだ。

ところが、抵抗運動は、特に一九六九年後半と一九七〇年初め帝国主義の考えていたほど生やさしいものではない事を証明してみせた。客観的にいって、抵抗運動は大規模のアラブ大衆運動の端緒を作ったのである。当時抵抗運動がアラブ大衆の分極化を推進させてゆく力を止めるものは何もないようにみえた。

抵抗運動は、人民大衆が敵と対決するのに革命的暴力を行使する

隊は抵抗運動に激しい敵愾心を持つよう心理的、政治的な教育を施されている。物質刺激も大きく取り入れられているから、一九六七年六月当時は兵士の給料が九ヨルダンディナールなのに、今は一九ヨルダンディナールである。(日本円で約一万九千円。ヨルダンの平均収入は月——円である。)この軍事機構の有効性テストは一九七〇年九月以前の対抵抗運動弾圧で行われている。更に、民族主義者やヨルダン政府のやり方に余り乗ってこない部分は全て、軍の将校クラスでは追放されている。こうしてヨルダン反動軍は何の気かねもなく、人民大衆に襲いかかる準備が完了しているという訳である。

更に、ヨルダン反動政権は、物質力を駆使し、又抵抗運動の弱点を逆手にとって、ヨルダン河東岸住民の過半数を反抵抗運動に動員してきたのである。抵抗運動を破壊すべくありと全ゆる事が為された。例えば、知識人・ジャーナリスト、芸術家のお抱えグループを雇ってヨルダン体制の史的、学問的基盤なるものを作り、偏見による地方意識を作り上げた。又、王室を主軸とするヨルダン特有の伝統なるものを作りにかかった。このために、劇、歌、詩の大キャンペーンがはられたのである。そして我々は、それにヨルダン反動政権の政治・軍事的対抵抗運動策とベテンを加えねばならない。ヨルダン反動にそうした経験を与えたのは、斗う人民を抑圧・虐殺してきた経験豊かな帝国主義者であった。

扱て、我々が現在直面している新政治情況の最たる特徴は以下の如しである。

反動政権が軍事・抑圧・監視権力として回復し、帝国主義の全権限・経験に依存している事、加うるに、ヨルダン意識、感情を作り事を強調したモデルとして登場していた。又、民族主義政権に圧力をかけるようになってきており、そうした政権を乗り越える民族運動出現を準備し、中東における帝国主義の利害と基地、とりわけヨルダン反動政権が代表するようなものに対する真の脅威となつてもいた。同様に、抵抗運動内部の左派勢力は中東の全政治的見通しについても圧力をかけ始めた。特にイスラエル、帝国主義の権益、反動政権間の有機的つながりに重点をおいた中東和平解決案に対する立場、そして民族主義政権の指導を乗り越え、民族主義政権の保護、監督に屈しないというのが左派の主張であった。

アラブ世界における米の利害は基本的なもので、物質的・戦略的両方の価値がある。

支配的帝国主義権力に不可欠の財源であり、アラブ世界外における帝国主義の経済支配の環と基礎的につながっているのだ。例えばアラブの石油に対する米の投資は、米の海外投資のわずか二・五パーセントにしかならないのに、米が海外投資から吸い上げる全収入の四五パーセントになるのである。一九六八年度には米の会社はアラブ石油から二四億一八〇〇万ドルの利益をあげるといふ漏手に粟式商売を楽しんでいる。更に一九六九年度の米対アラブ貿易は五億四五〇〇万ドルにのぼる黒字となっている。これは米の貿易収支総額の三四・二パーセントに相当するのだ。

以上の例は、どの位帝国主義がアラブ世界で略奪をしているかに関するほんの手始めにすぎない。米系でない西欧石油会社は、一九六八年に掘出し段階のみで一〇億ドルの利益を得ている。この金は西欧の大アメリカ独占体の財布に入る運命にある。西側独占企業は投下資本につき六五パーセントの利益をあげているが、こういう割

の良い投資は世界にも列がない。加えてこの略奪には戦略上の意義も深い。米侵略軍がインドシナ戦争で使う燃料の大部分は、米石油会社が支配するサウジアラビアの港ラスタヌヌーラの石油精製所から直接来ているという紛れもない事実が象徴されている。

上述した米の搾取現象は、こうした状況に決着をつけるべく闘いを貫徹する潜在能力を持ったあらゆる民族解放運動を粉砕せんとする米の真剣ののくろみに反映されている。抵抗運動の発展が加速度化している事、大衆をひきつける魅力がある事、アラブ民族解放運動に対する有効性が増大している事、イスラエルの存在をアラブの富に対する米帝の支配と結合させて把握せよとする抵抗運動の高まる声、國防省と慮着した米研究機関(ランドコーポレーションとかフ・ド財団等、of C A I N・I C I Aの頭脳狩り等)の研究が出した結論、これら全ての結果として米指導部はますます抵抗運動の現実的・将来的危険性を根こそぎにし、そうして中東を第二のペトナムとさせぬ為全力をもって直接監督に乗り出さざるを得なくなってきた。

ニクソン自身に言わせると、中東は帝国主義にとって「第一地帯」となっているとか。一九七〇年の九月、ヨルダン内戦はニクソンの生涯でも最も苦しい時であったとするニクソンの声明が何故なのかはこういう訳なのだ。そしてそのヨルダン内戦時にホワイトハウス内に戦斗を監督し、毎時間ニクソン大統領に戦斗の成り行きを報告する報告書を出す作戦指令室が設けられたのも同じ理由による。

つまり、帝国主義は、イスラエルやヨルダンをけしにかけて抵抗運動攻撃を単に脇から手助けする立場から、抵抗運動襲撃、抹殺を責任をもって行う主要な勢力として前面に登場してきたのだ。

をかけるというものであった。そして、西独駐屯の米軍を迎え入れる為に米の第八空挺部隊をアンマン飛行場に動員するものでもあった。一九七〇年の九月ヨルダン内戦後、米はヨルダンが抵抗運動に対して大打撃を与えた見返りとして次の三年間に一億二千万ドルを与えた。米上院はイスラエル、南朝鮮、ヨルダンの三国は、米の海外援助成功、有効性を証明したとみなしていた。以上は一九七〇年九月、及び以降ヨルダンを米がどれ程重要視していたかを如実に語っている。

米を筆頭とする帝国主義が抵抗運動と地方反動政権の闘いに全ゆる助力はするが直接介入は手控えるという時代から、前面に登場して直接対決に乗り出すようになったのが現段階の主たる特徴である。

一九七〇年九月末、抵抗運動が直面してきた客観情勢を扱う際には以上を考慮に入れねばならない。

#### 民族主義政権の立場

抵抗運動の初期(一九六七―一九六九)敗戦をこうむった民族主義政権は、対イスラエル戦に踏みきる事もイスラエルとの交渉過程に進む事もふんぎりがつかないでいたのだが、そうした民族主義政権はイスラエル承認、イスラエル国境承認、イスラエルのヨルダン河分水の主張承認と引き換えに一九六七年戦争で占領された領土を返還せよとイスラエルに迫る切札として、抵抗運動を利用しようと考えていた。以来、一般的に言ってこうした政権は抵抗運動と同盟関係にあったし、少なくとも彼らがそう公言していた。

こうした民族主義政権は、人民の多くは民族政権の約束を真に受けていたが、抵抗運動に対抗する事が出来なかった。ヨルダン軍事

例え米軍が、直接そうした斗いに介入してはいないという事実を無視するとしても、米が抵抗運動攻撃にできる限りの力を出している事、全てのものがこの斗いに備えて待機中で(ヨルダンの反動戦線の陰に隠れているが)抵抗運動攻撃に持てるだけの経験を動員して援助し指揮した事は否定のしようもない。

米帝介入は全面的なものであった。海外のヨルダン宣伝監督をも含めて。米情報センターに入ってくるCIAの指揮の結果、米帝は「ヨルダン人」と「パレスチナ人」の斗いと分断を深めるのに力があつた。その後発行された実録をみればこれは明らかになる。

正確を期すと、一九七〇年六月、ワシントンはアンマンの「国際開発機関」(一般的公安局)長官を通じてヨルダン軍訓練、顧問によるヨルダン軍の諮問というつながりを確立した。この国際開発機関の「公安局」はラテンアメリカへ行けば、広範な抑圧・弾圧の実績で鳴り響いている代物なのである。その任務とは反動政府の弾圧体系に多様な形の援助を与える事にある。やがて、ワシントンの警察学校で訓練を受けた六五人のヨルダン軍将校が九月の斗いに備えヨルダンの責任ある部署についた。ワシントンはヨルダン、イスラエルと共に一九七〇年九月にむけた緊急プランと呼ばれるものを準備した。その責任者はヘンリー・キッシンジャーであった。

CIAからは長官のリチャード・ヘルムス(一九六六―七二現イラン大使)ベンタゴンからはデイヴィッド・バックカード、参謀本部からはトーマス・ムーゼル提督が参加し、イスラエル、ヨルダン大使も参加した。

この緊急プランは、もしンリアが抵抗運動援軍に動き出したらイスラエルがシリアを攻撃し、米は第六艦隊の示威行進をしておどし

機構崩壊によって生じた「真空状態」は民族主義政権の政治的崩壊に通じた。だから民族政権は一九六七年以前は抵抗運動を否定的現象としていたが、敗戦後はその態度を変更せざるを得なかった。民族主義政権はイスラエルに圧力をかける切札として抵抗運動をつなぎとめておかねばならなかった。しかし、一九七〇年中華になって一九六七年の国連決議二四二実行が有利な状況になってきた。米はロジャースプランを提出し、国連決議案実行を真剣に考え始めたエジプトはこれを受諾した。

エジプトのロジャースプラン受諾とは、敗戦来、口先だけの戦争を吹聴せざるを得なかったブチブル軍事政権の敗北主義路線の論理的発展であった。そうしたエジプト政権は、大衆への対応、大衆動員への恐れ、反動政権との停戦、反動政権の援助なるものへの依存、敗北へエジプトを導いたと同じ階級勢力に立脚している事、などから実質的には更に敗北主義的なロジャースプランを受け入れる以外道がなかったのである。

「民族主義政権」の立場の変化は抵抗運動に直接、間接の影響を与えずにはおかなかった。投降を受諾する事は、まぎれもなく抵抗運動消滅を認める事に等しいからだ。抵抗運動は、全体的にこうした政治的解決を拒否した。勿論、当時の抵抗運動はそうした解決案実行にとって真の障害となる力をもった軍事、政治レヴェルに到達していた。更に、抵抗運動内の左派は(革命的・政治的立場に大衆的支持が集っていたので)抵抗運動総体に左派的立場をとるよう圧力をかける事ができた。こうした事実から、民族主義政権が抵抗運動を隷属できなくなり、抵抗運動の方が自らの戦略的枠組の中に民族主義政権を吸収して行った。こういう事情から民族主義政権は抵

抗運動と対立関係になり、何とかその勢力をそごうと準備するようになった。

抵抗運動の新たな客観的情勢把握に右の事も重大な要素の一つなのである。つまり、特定の勢力が今までの支持の立場からその逆へと移行したのだから。この移行は勢力関係に基本的・急速な変化をもたらした。民族主義政権は今や、客観的には革命的現象としての抵抗運動弱体化、そして究極的な消滅を計る勢力と手を組んでいる。だからといって抵抗運動の抹殺を望んでいるというのではない。只自分達の都合が良いように、独立した革命的な政治有効性を麻痺させ、そうして降伏政策に同意させようというのである。

#### d 国際的立場と抵抗運動

現代の民族解放運動は各自が相互に緊密に関連し合っているし、社会主義諸国と資本主義・帝国主義諸国内のプロレタリアの闘争とも結びついている。だから、この三つの勢力が各自に肯定的否定的効果を及ぼし合うし、それは彼らの闘争の発展に反映される。

パレスチナ又はアラブ民族解放運動を世界の反帝闘争から孤立したものとする視点は(領域においてこの運動は世界的なものだ)空想的なもので、現代の闘争の性格、次元、弁証法的関係認識ができていないものだ。

以下の現象は、パレスチナ・アラブ闘争運動に必然的に影響を与える。

西欧ブルジョア民主主義体制内の不活発な労働運動、社会主義諸国統一の裂目、大衆運動に代換物として売り込んで来たブチブル・修正主義的軍事政権の復活。

他方、パレスチナ抵抗運動の方も反帝闘争の国際性理解ができていないから、世界中の解放運動・社会主義諸国・資本主義諸国内のプロレタリア党と緊密な同盟関係を作る将来の認識がない。この弱点は、一般的に言うなら、世界レベルでの政治活動の枠組として、一九六七年十一月の国連決議案二四二を世界の多くの進歩的國家が支持するようにさせた。又、この弱点故に抵抗運動やアラブ民族解放運動の利益に向け、そうした支持を切り崩す事ができなかったのもある。

この責任の一部は指導部にあるが、全責任をひっかぶせる訳にはいかない。以下の要因がそれを説明するが

a、民族解放闘争が経ていた一般的状況

b、社会主義諸国の足並みが揃わなかった事

c、資本主義諸国内のプロレタリアートの状況

d、帝国主義陣営がかけている全体的攻撃という状況

e、帝国主義が行っている“ベトナム化”政策(これは何もベトナムだけに限った政策ではないのだ)

更に、アラブ民族主義、ブチブル政権が反動政権の意を迎え、進歩的運動(つまり共産党、労働運動、青年の蜂起、不満等)に弾圧を加えている事から、現情勢下で、もっと進歩した国際同盟関係削出の障害となっている。加うるに、抵抗運動内左派勢力は、この点を何とかしようとするが、正当な注意を喚起していないのだ。

#### 四、A抵抗運動の主観的条件

抵抗運動の危機的側面を説明するのに、客観的条件だけ挙げつら

っても不十分。抵抗運動自体、その階級、その態度、綱領を検証せねばならない。問題を明らかにするには以上の点が基本的役割りを果たして来たし、これからもそれは同じだ。

抵抗運動は、現段階では帝国主義に挑戦するだけの条件を備えていない。労働者階級を代表する革命党が指導していないから、抵抗運動は闘いの困難性に直面した時、そして革命の利益となるような困難克服・勝利に欠かせぬ主観的条件準備の理論を持ち合わせていない。それらは

- 闘いに明確な視点を与える革命理論。
- 闘いを領導する確固たる党。
- 労働者階級とその革命党が指導する全ゆる階級・政治勢力の動員を持つこの党が、広範な民族戦線を指導する事。
- 革命的個々に規律・有効性、大衆に対する名譽ある対応を創出する組織構造。

抵抗運動は、こうした事の意味に気づいていないようだ。だから全体としてブルジョア・ブチブル間の同盟が、代表するグループに指導権を委ねて来たし、今もその尽なのである。こういう二つの階級は知的・政治的動揺路線、組織的不安定、そしてそれらが結果させる革命運動の否定的面を代表している。

抵抗運動内の左派勢力は、

○ 未熟で、知的・組織的、戦闘レベルで未だ真のマルクス・レーニン組織へ脱皮していない。

○ 各自の立場が不統一。実際、多くの場合、相互に協力し合うというよりも喧嘩し合っただけだ。

○ 自らの理論的、政治的、軍事的立場を誰かに認めさせず力と規模が

まるでない。

抵抗運動をブルジョア階級が指導して来たという事実は、抵抗運動の危機を説明する際、考慮せねばならぬミスやある態度を結果させたのである。

a 反動政権に対する態度

総体としての抵抗運動の構造とブルジョア指導は、危険なミスつまり、ヨルダン反動政権に対する正しい認識と対応を明確に規定しなかった、を結果させた。抵抗運動の主力をヨルダンに集結させ、ヨルダンに存在する対権力の立場を曖昧にした事は抵抗運動を觀念論に沈没させ、基本的、実際的な事柄に対する明確な政治的対応が無かった事を意味する。こうして、とんでもない結果になったのは明らかだ。

ヨルダン政権とは、元来帝国主義とシオニズムがパレスチナにおける陰謀達成に向けた基地として、でっち上げたものだ。歴史をみればその事実は紛れもない。ヨルダンは、完全にそして有機的に米帝と癒着している。そうして、ヨルダンは敵陣営の一部だ。こうした事実があるというのに、抵抗運動指導部は(階級・理論的構造と明確な視点を持たなかったが故に)ヨルダン政府は友人足り得るし、少くとも中立の立場をとるだろうと計算したのだ(六月敗戦後も攻撃をかける能力があった事と、ヨルダン政府のごまかしのスロイガンにたぶらかされて)。

ヨルダン政府は時折り、抵抗運動を攻撃したが、部分的衝突であるとか、抵抗運動の方がミスをしたのだから、抵抗運動が自粛すればそういう事態は避けられると説明した。

こうした誤った評価を基盤にして抵抗運動は、ヨルダン内で公然

と活動を行っていた。

軍事基地、幹部、場所全てはヨルダン政府につけ抜けてあった。まるで解放区に在るが如き活動と存在様式をしていたのだ。これは部分的まじりであるとか、善意ある思い違いとかいう類いのものではない。基本的にいって、現歴史段階における帝国主義——反動の弁証法的關係把握ができなかった事、帝国主義の活動力学を見抜けなかったからに他ならない。それができる為には、革命理論（労働者階級理論）とそれによる現実分析、その結果として生ずるものを基礎にする展望がなければならぬ。その結果は単に軍事上ではなく、政治・倫理的なものでもあった。だから、抵抗運動側の動員規模、反動敵と対決するんだという決意・準備は、敵の弾圧機關に及ばなかった。それが明らかになったのは、九月の闘いにおいてである。抵抗運動は公然たる闘いを強要され（これはゲリラ戦初期段階の原則に反する）たばかりか、ある抵抗運動組織指導部はびっくりさせられた。こうした段階は闘いの際中もその後も（一九七〇年九月アンマンから一九七一年七月ジェランの間）続いた。つまり、ヨルダン政権の考え方を変え、抵抗運動と共存させるのは可能だという考えがちっとも新たまらなかつたのだ。

もしも、抵抗運動が革命的展望を基盤とした対ヨルダン当局政治立場をとり（ヨルダンを敵陣営の一部とする）、地下組織を作っていたなら、確かに全く異なる結果になっていたであろう。抵抗運動の方がヨルダン政権に大攻撃を与えていたであろうに。

b ヨルダン大衆を抵抗運動はどう扱えるか。

抵抗運動が犯した主要な誤りは科学的、革命的立場をとれなかつた事もあるが、ヨルダン大衆への対応もある。

大衆は、全面的に革命に背を向けるようになってしまった。

ヨルダンの大衆は、ヨルダン・パレスチナ両人民の同時的敵である帝国主義・シオニズム・反動に対する闘いを革命が行っているという事実にも係わらず、自分達が革命の一部であるとは思わなかつた。

この二つの政治的誤謬（つまり、抵抗運動が存在している土地における内部敵に注意を怠り、主要な友人、味方を無視した事）の効果を正確に概念化してみると、現在抵抗運動が直面している困難な状況がどれ位、その誤謬によって結果したものであるかが判る。かつてはヨルダン人民の支持を受けてヨルダン反動と対峙していたのが、今やヨルダン反動は人民を動員して抵抗運動に敵対させている。この二つの状況には雲泥の差があるのだ。

抵抗運動指導部は、あたかも自らがヨルダン民族政府の代わりでもあるかのように振る舞い、ヨルダン民族運動の任務を全うするに足るものが自分達の綱領の中にあるかのように振る舞った。更に抵抗運動指導部は、何か訳あつての事だろうが、ヨルダン大衆にアピールする時には、現支配階級の有機部一部である（そしてその道具でもある）部分に伝統的に大衆を代表するシンボルとみなされていられるを通してやつた。

分析的科学的展望を持っていかなかったが故に、抵抗運動指導部は抵抗運動を片づけるのに最良の手がかりになると、米の諜報機關がみなした（米情報局への指示を通して）方向へと進んで行ったのだ。それはパレスチナ人とヨルダン人の分割・区別である。パレスチナ人だけの労働組合、組合運動（学生・労働者・自由職業家の）を作っても、当人の意図にはおかまひなく、反動政権の政策を

抵抗運動は、主要にはヨルダンを拠点とするべくヨルダンへ来たからには、そこにおける立場を明確にする必要があつた。即ち、

(a) その主要な敵は誰か？

(b) 抵抗運動の勢力拡大を助け得る友人は誰なのか？

ところが抵抗運動指導部は、この基本的な理論・分析過程をとらなかつたのだ。だから指導部は対イスラエル、対シオニズム「パレスチナ人民の革命」原則にのみ固執したのだった。抵抗運動とヨルダンの全ゆる勢力との關係など知った事か、そいう勢力は我々の闘いとは何の關係もないとでもいうように。抵抗運動は純「パレスチナ革命」としてしか自己を認識していなかつた。つまり、当時自らが存在していた地でもあり、存続できるか否かの鍵を握っていたヨルダンをも含めた全てのアラブ諸国に内政不干渉という立場をとつたのである。

もし、抵抗運動が明確な科学的・革命的展望を持ち合わせていたなら、ヨルダン政権も敵の片われであり、ヨルダン人民は（ヨルダン政権の下で搾取・抑圧に呻吟していた）味方である（ヨルダンにおける力關係を自らに有利に変えるように抵抗運動とヨルダン人民の闘争を統一している味方）事を認識したであろう。如何にせん、抵抗運動はこの大問題を無視し去つたのである。だからヨルダン人民も抵抗運動の初期の発展期に、感情的な支持を見せたに止まつた。それもヨルダン人民大衆の愛國的・民族主義的感情からでた事であつた。しかし、感情的支持と意識的な革命的動員とは別のものだ。

ヨルダン大衆の民族感情は、抵抗運動の犯す誤りを容赦しなかつたし、その誤りは日々の嘗為に否定的な影を落していった。ヨルダン政権は抵抗運動が大衆を巻き込む能力をなし崩しにするべく、ヨルダン主義を鼓舞して抵抗運動の誤ちを利用した。事実、ヨルダン

有利にする事にしかならなかつた。

指導部の展望は大変狭かつた。以下にあげるのはその体现である。

(a) 階級分析

(b) 軍事力育成に向けた対応

(c) 分析化と役所包囲陣型の可能性への対応

(d) 農村、遊牧民内の政治活動への対応

(e) 封建、部族有力者との關係

指導部はこうした有力者が大衆の代表、更には大衆にとって変わるものであるかの如き対応すらした。

以上の全ては帝国主義者にとって実に有益であつた。

○ 抵抗運動と民族政権

抵抗運動指導部は、対アラブ民族主義政権において戦術的・戦略的立場を正しく規定する科学的・革命的展望を持たなかつた。

こうした政権の階級基盤は（帝国主義・シオニズムとは敵対していた）、戦術的に言って、反イスラエル・反動の闘いで抵抗運動と同盟を組まずもつた。しかし、戦略的に言ったら、長期人民戦争方式によって反帝・反イスラエルと闘う事ができないから、抵抗運動と矛盾する立場にある。更に、パレスチナ人民が直面している政治的かつ死命を決する状況とも矛盾關係にある。

民族主義政権——抵抗運動の關係を支配する法則は、簡単なものではない。対立（解放に向けた人民戦争戦略の発展、中東問題解決に対する階級主義的政策に關して）と同盟（反帝・反シオニズム・反反動の闘いにおけるそれ）が同時にからみ合っている。民族主義政権との対立／同盟法則実現には（民族主義政権の方も、この法則に支配されて、基盤とする階級勢力の変化に従って動くのだが）、



一般的に言って抵抗運動が備えて来なかった類の戦術能力を要する。抵抗運動は(客観的にみて、日和見主義的やり方だ)民族主義政権との同盟を最重要として来た。これは、それがもたらす総体的結果から、民族主義政権の利益に叶い、彼らの抵抗運動支配政策に益した。敵との軍事休戦からくる全体状況の結果、民族主義政権は抵抗運動と民族主義政権グループ内で益々発言力を増していった。民族主義を装って、三年間をかけて民族主義政権は、抵抗運動内部の代表的存在としてのし上った。こうして、民族主義政権の後見を拒否し、民族主義政権に抱き込まれないとする全ゆるスローガンにも係わらず、抵抗運動は民族主義政権のひもつきとなり捕囚の立場に追い込まれたのだった。

この戦術上の同盟は、上述の事に加えて、中東諸国の新政治勢力、新しい階級結晶化過程を容易にした。明らかに、そういう振る舞いは全アラブ解放運動の不可欠部を為す抵抗運動にとって、この上もなく危険なのである。この点は(後でもふれるが)基礎的・基本的問題に関係がある。つまり、抵抗運動指導部がパレスチナ大衆の闘争、アラブ民族解放運動の全的向上関係の性格、相互影響の度合いを十分展望しきれなかったという事。そして指導部の視野は、抵抗運動をアラブの民族民主革命とは無関係の個別現象としてしか扱えられなかった。

#### d 抵抗運動とアラブ大衆

抵抗運動指導部は、抵抗運動とアラブ大衆・アラブ民族解放闘争を闘いの全ての次元から明確な革命的展望を持って把握しなかった。抵抗運動は、客観的・主観的条件の故に、全体的アラブ解放運動の一部でしかあり得ない。この運動の枠外に出たら、もうどうあが

られない。この点を、上述の事に加えて、中東諸国の新政治勢力、新しい階級結晶化過程を容易にした。明らかに、そういう振る舞いは全アラブ解放運動の不可欠部を為す抵抗運動にとって、この上もなく危険なのである。この点は(後でもふれるが)基礎的・基本的問題に関係がある。つまり、抵抗運動指導部がパレスチナ大衆の闘争、アラブ民族解放運動の全的向上関係の性格、相互影響の度合いを十分展望しきれなかったという事。そして指導部の視野は、抵抗運動をアラブの民族民主革命とは無関係の個別現象としてしか扱えられなかった。

この条件は無視できぬものだ。かかるに、抵抗運動指導部は民族統一の意味を全く理解しなかった。民族統一なるものの達成に向け提出された全ての形態は上からのおしつけによる支配維持をもくろんでおり、政治的にそれと同意しない多くの勢力を包摂する事ができなかった。こうした形態が、それに異議を唱える勢力を納得させうるだけの明確な綱領もない儘提出されたからである。

こういやり方は何もない所からいきなり出現したのではなく、ブルジョア・プチブルの思考様式の結果として出て来たものだ。この二つの階級は、民族統一問題を階級なしで考えるからだ。つまり民族統一とは階級を越えた問題であり、自分達の支配、独裁に利用できるものだという訳。

「民族統一」への動きは、抵抗運動指導部にとってはいつも感情的アピールと不明瞭なスローガンを持って対応するものだった。だ

#### f 民族統一問題

敵との対決において民族統一は主因の一つである。勿論、プロレタリア革命理論をとる革命党の存在は、反帝・反シオニズム・反反動そして優勢な敵に対する戦争で大衆が勝利できるか否かを左右する主要条件の一つだ。次のそれは、共通の敵を持ちその撃退に利害を持つ全勢力が広範な形態で作り上げる民族統一の達成である。この条件は無視できぬものだ。

かかるに、抵抗運動指導部は民族統一の意味を全く理解しなかった。民族統一なるものの達成に向け提出された全ての形態は上からのおしつけによる支配維持をもくろんでおり、政治的にそれと同意しない多くの勢力を包摂する事ができなかった。こうした形態が、それに異議を唱える勢力を納得させうるだけの明確な綱領もない儘提出されたからである。

こういやり方は何もない所からいきなり出現したのではなく、ブルジョア・プチブルの思考様式の結果として出て来たものだ。この二つの階級は、民族統一問題を階級なしで考えるからだ。つまり民族統一とは階級を越えた問題であり、自分達の支配、独裁に利用できるものだという訳。

「民族統一」への動きは、抵抗運動指導部にとってはいつも感情的アピールと不明瞭なスローガンを持って対応するものだった。だ

いても抵抗運動は目標貫徹などとも叶わぬ。

パレスチナ抵抗運動とアラブ世界におけるアラブ民主革命・社会主義を目指す闘いととの関係は単なる支持・援助という次元に止まらない。それは実際のところ唯一の闘いの戦略的關係なのだ。

抵抗運動は、アラブ大衆とアラブ民族解放運動を物質・精神的支持という視点からしか扱えられず、アラブ世界における戦略上、同等の同盟という視点を欠いていた。又、戦略レベルから言っても、真のアラブ同盟者がなければ抵抗運動は戦略上の困難を克服できぬ事にも気づいていなかった。

この点をささえるなら、現在何が起っており、それを突破するにはどうしたら良いかが判るのだ。抵抗運動が直面している危機をアラブ民族運動(一般的に言って、プチブル指導部の下にあるが)のそれは別個のものともみなすのは馬鹿げたまちがいだ。にも係わらずアラブ民族運動は、一方では反動政権の抑圧・弾圧に隷属し、他方では軍事政権による壊滅の陰謀にさらされた儘である。同じ観点にたつたら、アラブ解放運動の前進、新しい階級勢力の分析化を勝ちとり、それを動員・組織化できるか否かは、弁証法的に言えば、パレスチナ抵抗運動に反映されており、抵抗運動が抱えている基本的問題解決に力を貸す事ができるのである。

#### e パレスチナ大衆との関係

パレスチナ大衆と抵抗運動との関係は、何よりも先づ大衆に依拠し、政治意識をもって大衆の動員・組織化に取り組み、そして大衆が自らの史的責任を果たすようにさせるという革命の視点に立っていないかった。つまり、

○動員はプロバガンダ的、ドグマ的であった。

から、民族統一の内実を代表する闘争的綱領と内部関係を支配する組織綱領の基盤を作りあげる明確な政治・組織路線定義を回避して来たのだ。

民族統一の一つの形態実現に向けた最低の政治・組織綱領発展を多くの要因が阻止した。中でも最たるものは、アラブ政権がパレスチナの諸グループを分裂・分断し、相互に反目し合うようにした事である(いろいろな形で感したり、煽てたり、墮落させたりして)。と同時に、抵抗運動内左派分裂も大きく民族統一の障害となった。ある左派グループは(自らのプランに関連した戦術上の必要性から)右派の主張を支持し、全運動が最低限綱領を承認せざるを得なくなるように左派との同盟を蹴った。

こうして、抵抗運動指導部は民族統一に向けた最低限綱領をうち出せなかった(実現の可能性はあったのだが)、パレスチナ大衆を急速に動員し組織化する事もできなかった。更に、アラブ・世界レベルでの革命状況深化と人民同盟達成をも遅らす事になった。おまけに、民族統一に向けて検討された全ゆる形態の超現実性と滑稽味から、愛国的・進歩的パレスチナ勢力間にバラバラの状態が続く事になってしまった。こうして、反帝・反イスラエル・反反動に

#### g 軍事科学における後進性

大衆対帝国主義・シオニズム・反動の敵対矛盾解決の手段として革命暴力を用いる事の意義は、軍事的・技術的にはるかに進んだ敵に対して革命暴力を用いるという原則と共に、軍事科学・力学を体得する必要と重要性にある。自らを守り敵と渡り合う為、革命は多くの軍事原則を要する。こうした原則がないと革命の初期に敵に

やられてしまふ危険性があるのだ。

しかるに、抵抗運動は軍事的に言つて、そういう点をおさえていなかったのだ。(例えば、機密・武器・戦術の習熟、対決回避、訓練の適当な水準、武器が適当な型である事、etc)。更に抵抗運動は、戦死の美化、自殺的英雄主義讃美、冒険魂の鼓舞等の古い武装行動に依存していた、プロバガンダの分野で、人民の武装闘争は正確かつ綿密に計算された原則、闘争感覚を集体的に昂める事、敵に対する崩壊的・戦闘的情報網構築、戦略的勝利達成に役立つ無数の小さな勝利を積み上げてゆく事に依拠する政治科学であるという事実に係わらず、革命的軍事科学の欠除がもたらした重大なミスは

(a) 被占領地内で多くの抵抗グループが武装組織を構築できなかった。

(b) 指導部は以上のまちがい直すどころか、多くの嘘偽のレポートを出して嘘の上ぬりをしようとした。

ガザ地区を除けば、被占領地内の戦闘経験において抵抗運動指導部は人民戦争の軍事技術習得、世界の勝利した民族革命の経験に根ざした政治科学から学ぶ事ができないでいる事を証明したのだった。

#### h 抵抗運動の組織的性格

明確な政治視点がなかったから、指導部は組織活動に十分注意を払わなかった。数量的に優勢な敵に立ち向うには、組織でもって当るのが最も有効な武器であるというのに。

だからある抵抗グループで先行する内部関係は、アラブ正規軍よりも若干規律が秀れているというだけで大した違いはない有様であった。こうして給料とランクの差異問題が生じてくるのだった。組織意識の欠除(恐らくイデオロギーが意識化されていない結果である

らう)と、戦士の政治的開化が遅々としていた事から以下のようなマイナスが表われた。

- 規律のたるみ、脆弱性
- 軍事力・政治力の脆弱性
- 特権と形式の過多

抵抗運動、その階級構成、そしてそれらがまちがった態度や実践にどのように現われるかを論じてきたが、この問題の重要性はこれでおわかりだろう。抵抗運動の否定的側面、まちがい、逸脱の現実はこちらでおこつたのだ。逆に、現在の抵抗運動の状態を説明する一部もそれである。抵抗運動の誤る実践は多岐あるが、以下にその最たるものを列挙すると

- (a) 官僚主義的指導部体制
- (b) 物の豊富さとその浪費
- (c) 大衆に対し卒直さを欠いた事
- (d) 無内容かつ大げさなプロバガンダ
- (e) 政治上の誤ち
- (f) 指導性の欠除もしくはす早い対応のなき
- (g) 派閥主義(民族統一問題に如実に表われた)
- (h) 武器の使用に適当性を欠いた事
- (i) 訓練が正確・適当でなかった事
- (j) 軍事上の形式主義へ依存
- (k) 戦闘方法の過失
- (l) ゲリラ基地の急増
- (m) 戦士に無駄な待ち時間を与えた事
- (n) 戦士のある者が市民を侮辱した事。彼らは農民の作物を駄目

にしたり、伝統慣習を馬鹿にしたりした。

こういう事がおこつたのも、一重に指導部の理論的・階級的構成故である。

抵抗運動は、客観的に言つて反帝・反シオニズム・反反動勢力だ。だからこそアラブ・パレスチナ人民大衆が支持を寄せもした。今日では抵抗運動はアラブ解放運動の前衛である。しかるに、肝心の指導部の構成、その結果として、現在の危機状況が何故なのかを我々は理解せねばならぬ。

#### 五 抵抗運動の左派勢力

抵抗運動内左派勢力がこうした主体条件変革をやりきれなかったのは何故だろうか?

相対的にみて、より明確な政治見識と対ヨルダン政権、対アラブ大衆・アラブ民族運動、対ヨルダン人民のより科学的・革命的展望を持った左派が存在していた。更に左派は、民族統一・全抵抗運動グループで実現化すべき広範な民族戦線構築に向けたより科学的・革命的視点を提出したのだった。が、その左派の特徴は

(1) 抵抗運動の眞の指導主流ではなかった。逆に、左派以外の部分が民族主義政権をも含めた全アラブ政権の支持を受けていた。更に、パレスチナ・アラブ大衆の意識レベルに非左派は民主的なやり方でもって感情的にアピールしたのだった。こうした支持を占有した部分が抵抗運動の主流であると主張する始末だった。

(2) 左派内部に統一がなく反右派闘争の足並みが乱れた。こうして左派グループの中には、抵抗運動の指導権奪還、ヨルダン傀儡政権、民族統一問題について左派の立場を抵抗運動がとるように努力

するかわりに、右派とくっついたりした。

(3) 左派は実践の面でひどく立ち遅れている。理論水準と実践のレベルのギャップに悩んでいる。そのギャップは大きく開いた儘である。理論が実践の裏づけを受けていないので、大衆に組織的・戦闘的・軍事的・政治的左派の道に進む指導ができきれない。

以上の結果から、左派の犯した大きな誤ち、左派が責任を負うミスを挙げると

(1) ヨルダン大衆への対応に於て、抵抗運動右派の実践にかわるもっと進歩したものを提出できなかった。左派が(a)ヨルダンに於ける労働者・農民、学生運動を開始し(b)抵抗運動指導部の地方主義的・右派的政策を攻撃したのは事実ではあるが、全体としてそうした闘いは部分的であつて、一貫して全ての面で戦略路線にそつて実践されたとは言ひ難い。

(2) ヨルダン反動に関し左派が主張した理論的・政治的意識(即ち帝国主義の攻撃をヨルダン反動がどう受けとめているか、ヨルダンは敵勢力の一部である点など)は組織的表現をとつていなかった。だからこの意識が眞の革命左派運動の任務達成には不十分な段階「伝道段階」以上には進まなかったと言えさるだろう。この政治「伝道」は抵抗運動の組織構造に自らを反映させてなかったし(本来はそうすべきのだが)、ヨルダンの反動政権と抵抗運動の戦闘的矛盾の結果としてきたるべき対決を承知し、それに備える地下闘争と人民闘争の原則にのつた実践をも組織活動としてやりきれなかった。

(3) 左派は党建設、又は左派の政治的戦闘的幹部育成過程促進に必要な努力に全力投球しなかった。左派はしばしばマルクス・レー

ニン党建設に比べたらさして重要でもない活動を仕方なく優先させて、本来の任務を怠った。

(4) 又、理論的・政治的・軍事的・組織的左翼小児病に苦しんだ。その具体例を以下に挙げると

- (a) エジプトのロジャー・スプラン受諾について戦略的立場を明らかにし、す早く戦術的対応と結合させられなかった。ロジャー・スプラン拒否の絶対的必要とその重要性にも係わらず、この拒否のやり方は当時存在していた可能性の全スペクトルを無視するものだった。
- (b) 対反動権力との闘争について、力の均衡の計算をまちがえた。だから戦術的にみて、まちがった対応・計画をしてしまったのだ。
- (c) 左派グループのあるものが大衆をたぶらかした。当時大軍事作戦と称されたものに関した軍事レポート発表を始めた時、又は嘘偽の軍事力誇示の他の形態でも右派のプロバガンダキャンペーンにのった。

(d) 多くの左派グループは、ヨルダン当局がヨルダン、アラブ世界、国際的に抵抗運動に関する混乱した認識を撒き散らすのを助けるような初歩的ミスをした。それはまちがったスローガンとか、そのスローガンに基づいた実践などの形態をとって現われた(例えば抵抗運動をヨルダン大衆から孤立させた「全権力を抵抗運動へ」というスローガン)。誤った実践とは、大衆の生活習慣・伝統を挑発したり、敵視したり、特にプロバガンダの面では一九七〇年九月のハイジャック闘争の結果などだ。この闘争を口実にヨルダン反動と帝国主義は九月の大量虐殺、運動団殺に乗り出したのだから。こうして、反動政府の動きの背後にあるもの、つまり不可避的に昂まっ

いった反動ヨルダン政権抵抗運動の敵対矛盾、対峙の真の理由は陰蔽されてしまった。九月十七日をパレスチナ・ヨルダン人民大会開催日、そして非軍事的不服従の日にしようと抵抗運動が決めた時、そのまちがいは明らかになった。ザイド・ベン・シヤキルは有名な公式覚え書きの中で、九月虐殺の直接の動機がこれであったとしている。

(e) 左派はヨルダンにいた間、アラブ世界の民族解放・民主運動と有機的な深いつながりは、戦闘に規定される直接的利害にとらわれた儘であった。

# ハーグ仏大使館占拠同志奪還闘争勝利!

世界革命戦線情報センター

全ての革命的同志・友人兄弟諸君へ!  
世界革命戦線情報センターは、日本赤軍の同志による9・13ハーグ仏大使館制圧同志奪還闘争を断固として支持し、闘争の勝利的貫徹を共に喜び、更なる戦列の強化を勝ち取ることを心から訴える。

ハーグ仏大使館制圧闘争は、敵の弾圧に対しては如何に闘うべきかを、捕虜になった同志に対しては、奪還することによってその名誉を回復し、なおかつ敵に打撃を与えていく革命主体のモラルを、武装闘争Ⅱ革命戦争の実践を通して表現した闘争であり、ヨーロッパ各国の武装革命戦線との緊密な共闘関係Ⅱ共同軍事行動作戦として、敵の弾圧の真つた中において戦い抜かれ勝利した闘争である。敵が、いかなる弾圧、防衛体制を敷こうとも、闘う人民の非公然的な地下ルートはいつ、どこでも敵の防衛線を突破、粉砕しうることを明らかにした闘争である。

72年5・30テルアビブ銃撃戦によって切り拓られた、プロレタリア国際主義と武装闘争の新らたな地平は、その後、7・20日航機H・J爆破闘争、シンガポールクウェート連続武装闘争、そして今回の仏大使館制圧闘争へと引きつがれたのである。

これらの闘争が、実体化した革命戦争は、世界の革命勢力の相互

の認識の一体化を推し進め、武装闘争の表現によって、闘う兵士・人民の交通網・交通形態・情報網を獲得するという、真の共産主義化の闘いを国際地下兵站線構築の実践を通して、最前線Ⅰ銃後、銃後Ⅰ最前線の相互連関的な世界的結合の同質化を勝ち取ることによって、敵Ⅱ帝国主義ブルジョアジー・シオニスト・反革命共に分断抑圧されている世界の諸革命戦線の連帯、結合を、共同軍事行動の実践によって追求していったものである。

そして今回の闘争は、PFLPとの同志的連帯共闘関係の中から、被抑圧人民の民族解放闘争としてあると同時に、世界帝国主義、シオニズム、シオニスト・イスラエル、アラブ反動派を敵とし、社会主義革命戦争の内実をもった、国際共産主義運動の最前線としてあるパレスチナ革命戦争の中で、自らを鍛え武装を勝ち取ってきた日本赤軍が、その戦列隊伍を国際的な地下兵站線の着実な組織化として、全世界を革命戦争の戦場とするべく、先進帝国主義本国へと進撃を開始した闘いであった。

プロレタリア国際主義と武装闘争の旗を高く掲げ、一國主義と合法主義の枠を突破し、敵権力の目に見えない人民の交通網・情報網人民の赤色シルクロードⅡ国際地下兵站線の確立こそ、今、我々は

急がねばならない。敵は帝國主義ブルジョアジー・シオニスト、反動共を、いつ、どこでも撃破し得る戦線を構築していかねばならぬ。

革命勢力の国際的結合団結に恐れおののいた、敵権力・反革命共は、奴らのあらゆる力を動員して弾圧に乗り出してきている。

日本赤軍「古屋」同志の、パリでの逮捕を起点とした仏帝警察権力、日帝警察権力、ICPO（国際刑事警察機構）一体となった弾圧は、逮捕、国外追放等、明らかに反革命予防弾圧、予防検束をあらわしたものである。また、日本国内においては、日本赤軍とその支援送り出しルート解明と称して、おなじみの「相調図」をデッチ上げ、東京、大阪、京都をはじめとする全国数十ヶ所を不当捜索しているのである。更にまた日帝警察は、ICPOパリ本部へ警察官を送り、国内には「国際刑事警察」なるものの新設を計り、国際的な弾圧体制の強化を目論んでいるのである。

我々は、これら一連の国際的・反革命弾圧を強く糾弾すると共に、日本赤軍の同志をはじめとする全世界の革命的同志、被抑圧人民との強固な連帯団結によって、必ずや、帝國主義ブルジョアジー・シオニスト・反動共をこの地上から一掃する勇気を組織するのである。敵の弾圧こそ、我々にとっては訓練であり、敵が弾圧に狂奔すればするだけ、我々はより強固な革命的隊伍を築くであろう。

同志兄弟諸君！

すでに、世界革命戦争の火蓋は切って落されているのである。

パレスチナで、アジアで、ヨーロッパで、中南米で火の手は上がり着実に戦線は拡大し強化されているのである。日本赤軍とPFLPをはじめとする、各国武装革命派との連帯共闘は強化されこそす

れ、弱まることは決してない。

日本赤軍の同志は、世界の被抑圧人民・革命兵士と共に、共通の敵に向けた真の人民の闘いを組織し、世界革命戦争勝利への進撃を日夜続けているのである。

かつて、日本からパレスチナへと延びた一本の赤い糸は、テルアビブ三戦士の尊い血の犠牲のうえに、今や、全世界へと張りめぐらされ、アラブ赤軍！日本赤軍の建軍武闘路線の下、各国革命戦争派との世界的規模での真紅の連帯を深め、国境を越えた人民の軍隊・革命の軍隊！世界革命戦線！世界赤軍構築へと一歩一歩前進しているのである。

革命とはその暴力性と世界性においてこそ真実である。

人民は、世界中の、いつ、いかなる場所に於いて、どのような方法でもって敵を倒す権利があるのである。

武装闘争を「テロル」だなどと叫ぶ輩には、「抑圧された人民の言葉は銃であり、その表現は武装闘争である」「武装闘争こそが抑圧された人民のヒューマニズムである」と言ってやろうではないか！同志諸君！

世界革命戦線情報センターは、更に進撃することをここに誓う！そして、全ての革命的同志、兄弟諸君が日本赤軍の同志諸君と共に進まんことを心より願う！

9・13ヘーグ仏大使館制圧同志奪還闘争勝利万才！

プロレタリア国際主義万才！ 日本革命万才！

パレスチナ革命万才！

世界革命戦線の創出を、世界革命戦線協議会へとまずもって組織し、世界党！世界赤軍・建設の第一歩へ！ 世界革命戦争勝利！

## ヘーグ仏大使館占拠闘争勝利万才！

日本赤軍

三名の戦士によるヘーグ仏大使館占拠同志奪還闘争は、日本赤軍の同志「フルヤ」を捕虜にすることによって戦う人民の熱い連帯と、地下から地下へと巡る人民の交通網を断ち切ろうとした日帝・仏帝どものたくらみが、わずか一ヶ月半余りの甘い夢でしかなかったことを彼らに思い知らせた。

同志「フルヤ」の逮捕によって、仏帝は国内の闘う人民の組織を破壊しようとして、卑劣にも極秘の態に捜査を展開し、またそれを受けて日帝も、国内の地下兵站線を放棄しようとしてヤツキにまっていたのである。そして同時に、パレスチナ革命と共闘してきた日本赤軍の歴史的真実を歪曲し、パレスチナの革命的人民の闘いの歴史的真実をも歪曲し、「パレスチナ問題が解決しつつある現在、日本赤軍は孤立し、ヨーロッパでの無展望な闘争を計画していたのだ」となどとデマ・キャンペーンに狂っていたのである。しかし、世界の闘いの現実、帝國主義者共が考えるほど、国境によって分断され、甘言によって分断されてはいない。今回の闘争によって日本赤軍は、断固として、世界の革命的戦線に次の諸点を明らかにしたのである。

一、帝國主義者に対する闘う人民の陣型は、日々着実に整えられ、日本赤軍をはじめとする世界革命戦争派は、いつ、いかなるところで、帝國主義者に対し闘いの火蓋を切ることが出来るのだと

いう事。

二、しかもそれは、今回のように奪還を予想した敵の警戒網を更に深く越えているのだという事。

三、多くのすぐれた闘争形態がそうであるように、今回の闘争によって日本赤軍は、これまでの幾多の闘いの歴史を継承し、更に一歩、大使館占拠という闘争形態を進めた事。この様に、実践の積み重ねによって定着した闘争形態は、不可視の戦線の闘争にイメージを呼びおこさせ、そうした中から戦線相互の連帯と共通の世界観と歴史観を持つに至る。偉大な武装闘争としての言語である。

四、同時に、同志奪還という闘争も世界中の革命的戦線に語りかけ、勇気づける偉大な闘争である。

このように、日本赤軍は、その闘争の歴史の上に、今回の闘争を勝利し、更に、その思想とその闘いの現実と、そしてその方向性を全世界の革命的戦線に対し明らかにしたのである。

今回の闘いによって、帝國主義者どもは、ますます共同した攻撃を預けざるを得ない。しかし、彼らが共同した闘いを組めば組むほど、彼ら自身の姿、帝國主義者としての世界性を明らかにするのである。それには、ますます味方の陣型を広げ、世界の革命戦線が一つの戦線として世界帝國主義と対決する、世界史の必然的道すじを、

敵が一步一步はまり込んで行くことを意味している。そして味方の側の陣型は、今回の闘争に対する敵の反撃などはるかに越えて、着実に勝利している。

日本の同志諸君！

日本赤軍の闘いは、戦場こそいかに離れているように思えても、日本の革命の戦列の中で、となりに胸を組んで闘っているのだ。パレスチナは速く離れた戦場ではない。世界革命は遠い未来のお題目ではない。今、世界の戦線は、抑圧された人民の言葉・武装闘争によって結ばれている。この現実に目をつぶつたいかなる革命運動も、もはやありえない。

## 声 明

### 声 明 1

我々日本赤軍は、オランダの仏大使館での新しい任務・即ち赤軍兵士奪還闘争を宣言する。

(一) この闘争型態は後に続く非妥協の革命闘争の一段階であり、我々日本赤軍の革命の総路線である。

これは我々日本赤軍が、何時、いかなる処においても世界中の抑圧された人民と共に、世界革命に向けたあらゆる戦線がすでに進行しているということである。

我々は世界革命が達成されるまで、絶え間なく、世界中の戦場で帝國主義者や同様の敵と闘い、前進することをくり返し宣言する。

これは我々の闘争の規律であり、革命のモラルである。

(二) 我々の世界中の同志達！！

日常的に人民の同一の敵と闘っている同志達！！

我々は、我々の革命戦争の過程で、仏警察による同志逮捕という困難な局面の内に、多くの同志・友人達に出会ったことを心から感謝する。

この事で得た教訓を、我々は、より一層確固な世界革命戦線構築に向けた武装闘争を完成させる進歩とすることを誓う。そして、我々の同志を奪還するための作戦の勝利が、世界の人民の前に、この誓いの証明として明らかになった。

我々は、敵の組織的な妨害策動を背景とする多くの困難さや、妨害のない前進など有り得ないことを、世界革命に向けた日常的闘争からの教訓として理解している。

我々の同志奪還闘争万才！！

世界革命戦線の進撃万才！！

世界帝國主義打倒！！

一九七四年九月一四日

日本赤軍

### 声 明 2

オランダにおける作戦に関する日本赤軍声明 2

日本赤軍は、オランダ仏大使館の作戦に関して以下の声明を宣言する。

(一) 我々の革命的行為は、我々の計画書に従って進行している。仏・オランダ・日本帝國主義者敵共は、我々の勝利や、我々の同志が提出する「新しい諸要求」の主張をぐずぐずと遅らせることで、我

日本赤軍は去っていった軍隊ではない。日本赤軍はパレスチナを進軍し、ヨーロッパを進軍し、アジアを進軍し、そしていつも、日本を進軍しているのである。

ハーグ仏大使館占拠闘争勝利万才！

日本赤軍万才！

世界革命万才！

## 日 本 赤 軍

(二) アラブ人民の資源を奪取するために、世界的帝國主義組織の一派として昇進したシオニストと共謀するフランス・オランダそして日本帝國主義者達は、次の事を知るべきである。

もしあなた方が我々の同志を監禁したとしても、我々はあなた方の手から、確実に彼らを奪還するだろう。たとえあなた方が十人、あるいは百人の我々の同志を監禁したとしても、我々は十倍、百倍の結果をもって報復するだろう。

あなた方が我々の同志・友人に対して卑劣な弾圧を続ける限り、我々は組織的に、より以上の報復をするだろう。

々の作戦貫徹を卑劣な手段や戦術で失敗に終らせようと企てている。三人の同志と同志フルヤユタカは、我々の革命の計画に従って、また強固な我々の革命的規律とモラルの実践によって完璧に行動している。

パリの革命的な同志達に対する非妥協の作戦と、(仏政府に対する)警告は、共通の敵に対する共通の闘いとして固く結合し、連帯していることを明らかにしたのである。

(二) 日本赤軍は、我々の同志の要求に従って直ちに行動するよう仏・オランダ・日本帝國主義者達に冗談抜きに警告する。

我々の警告にもかかわらず、もしあなた方が我々の要求に応じないのならば、我々は更なる攻撃を加えるだろう。

あなた方は、あらゆる結果の責任を負うことになるであろう。人質の生命は我々の同志が保護している。しかし、彼らの運命はあなた方の手中に、我々の要求を履行するか否かの意志次第である。あなた方には選択の自由がある。だが我々には正当な我々の闘争に殉ずる断固たる決意がある。

我々は常にそうして来たし、今もそうである。我々はこれからもその様にし続けるだろう。

(三) 世界中の同志・友人達！

シオニストと結託している仏帝國主義者は、公然とあるいは隠然と、同じくシオニストと結託しているオランダ帝國主義者に責任を転嫁することで、またオランダへ同志フルヤを移送し、この様な難問を仏国内から締め出すことによって、仏の世論を欺こうとしている。

日本帝國主義者もまた、彼らが我々の同志を征服し、囚人として逮捕することを期待しながら仏・オランダと共謀している。

それでは、世界帝国主義の筆頭、米帝はどうか、あるいは、仏・オランダ・日本帝国主義へと貫通しているシオニズムはどうか、帝国主義者というものは、どこでも同じだということを我々は明確に理解している。

世界中の同志・友人達！

我々の共通の敵を打倒する、我々の闘争を結集しようではないか！我々の組織された革命的闘争を拡大し、深化させようではないか！世界革命統一戦線を組織しようではないか！

仏大使館占拠闘争勝利！

世界革命統一戦線に向けた、前段階闘争勝利！

世界革命に向けて前進せよ！

一九七四年九月一六日

日本赤軍

### 声明 3

世界中の同志・友人達！

日本赤軍は、オランダにおける作戦（仏大使館占拠）が勝利であったこと、特に我々の逮捕されていた同志を奪還することに勝利であったことを強調する。また我々は、次の事を宣言しよう。

(一) 全ては作戦通りである。日本赤軍の同志が単独に、革命的方法によって実行した。作戦の妨害や、同志を逮捕した敵・シオニストと同盟し共謀している仏・オランダ・日本帝国主義者の連続的な陰謀やマヌーバーにもかかわらず、それらの企てを見通していた我々の同志は、どんな手がかりも与えることなく、堅固に赤軍兵士のモ

ラルを保持し、最後まで彼らの任務を確固として貫徹した。

(二) この勇敢な作戦を通して、日本赤軍は正面から敵と向い合うこととなった。即ち、敵の銃弾には我々の銃弾で応え、彼らの攻撃には攻撃的な逆襲で対応することである。これは、敵帝国主義者に対する、唯一の革命的な非妥協の路線である。

世界帝国主義組織の軍事警察と、自ら考えている米帝の率いる敵の攻撃は、人民を抑圧し、搾取するばかりでなく、人民の革命的に組織された力をも制圧しようと、彼らの最後の武器であるあらゆる種類のマヌーバーと策謀を実行している。

世界中の同志・友人達！

敵のあらゆる策謀を壊滅するために、我々は諸経験の教訓・今回の教訓を共有するべきである。

(三) 世界中のブルジョアジー・帝国主義者諸君！

あなた方は、作戦を貫徹した我々の同志が与えた教訓を忘れてはならない。

あなた方は、それ以上空虚さをつのらせるような反革命策動をやめなければならない。

日本赤軍は、今回の作戦の目的を、我々の同志を解放すること、一定程度の報復に限定した。

日本赤軍は、我々の同志を八月中旬に釈放するように、さもないと同志解放闘争の責任を負うことになるだろう、と仏権力に対して八月中旬に警告を発した。仏権力はこの警告を無視したばかりか、途方もない手段で同志・友人を弾圧し続けた。

敵からのこのような姿勢のために、我々は革命のルールとモラルに従って攻撃を開始したのである。

### (四) 世界の資本主義者諸君！

あなた方が、世界の革命的な同志や人民を弾圧し続ける限り、我々の革命のルールとモラルは、この作戦のみで消耗することはない。それはまた、世界中の抑圧された人民の解放が達成されるまで持続し、我々を領導してゆくであろう。

あなた方のデッチ上げたエセ・ヒューマニズムは、帝国主義者のためのものにすぎないことを暴露し、白日のもとにさらすことになるだろう。それは、世界中の被抑圧人民の解放のために闘っている真の正義と、革命的ヒューマニズムによって壊滅するであろう。

### (五) 前進せよ！

敵に向って、より攻撃的な攻撃を貫徹せよ！

世界中の同志・友人達！

我々は、我々の主要なスローガンが「武装闘争による被抑圧人民の解放」であることを保証する。！

我々は、被抑圧者の共通の敵に向って闘い続けることを証明する！

日本赤軍の同志奪還作戦勝利万才！

前進せよ！

世界革命統一戦線を組織せよ、

被抑圧人民解放のための世界革命万才！

一九七四年九月一八日

日本赤軍

I.R.F.I INFORMATION C ENTER

東京都中野郵便局私書箱49号・エンゼルス企画室